
君はN P C ?

理祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君はNPC?

【ZINE】

Z8653X

【作者名】

理祭

【あらすじ】

剣と魔法、冒険者とモンスターの世界。小さな村に住む少年カリュはある日、森の中で小さなドラゴンと出会う。怪我をしたドラゴンを村はずれの元冒険者の家へつれていき、物語が始まった。

うつそうと生い茂った森の、少しひらけた場所には隙間から陽の光が差し込み、柔らかな雰囲気をかもしだしている。

かたわらには小川が流れ、何匹かの魚が泳いでいた。川べりにはちょうど腰を下ろすのに適した岩も散らばっていて、疲れた旅人が息をつこうとしたときにいかにもよさそうな風情だった。

森を突っ切って村と街をつなぐ街道には、自然とそうした憩いの場所が生まれるものだ。

そこに集まるのはなにも旅人だけではない。水を飲みに訪れた小型の草食動物、それを狙つて現れる肉食性の動物。森の生態系の縮図そのままに様々なものが入れかわり立ちかわり姿を見せる。

そして、人もまたその食物連鎖に連なる一つでしかない。

今、水辺には一匹の存在があった。

背は低い。ずんぐりとした体躯に土氣色の肌をしている。二足歩行だが背中を丸めた前傾姿勢で、凶悪な顔つきには理性の色が薄い。それはゴブリンと呼ばれている、この世界でよく見られる生物だ。その存在についてはよく知られている一方、詳しい生態には謎の部分が多い。理由ははっきりしていて、それらと出会つてのうのうと調査をしていられないからだ。それらは人類とはつきりと敵対する関係にある。

人類が火をおこし、文字を得たそのころからすでにそれらについての記述が残つていて。それらは人に仇なす数多くの存在、そのなかでもつともポピュラーな存在とされていた。歴史上、人類がまだ種としてひ弱だったころには、それらに追われ、狩られていた時代

もあるといつ。

文明が発達した今でもそれらが危険な存在であることに変わりはない。一時の休息を得ていた旅人がゴブリンに襲われ、被害にあつような事件は決して珍しくなかつた。

ゴブリンは獲物を探す視線で周囲を見渡している。手に子どもの足ほどもある太さの棍棒を持つて、もう一方には無骨な盾を携えていた。身体には革をなめした胸当てを身につけている。それらが人類と同じく社会的な生き物であり、独自の文化を持っていることは広く知られていた。

鼻を利かすように「う」めかすその姿を木蔭から見つめている一対の瞳がある。真剣なものと、それを隣で呆れるように眺めている眼差しは、どちらもまだ幼さが残つていた。

「ねえ。カリュ、ほんとにやる気？」

呆れたような視線の主が、呆れたような声で言つた。

「やる」

それに短く応えた声には強い決意がこもつてゐる。

声の主は少年だった。カリュという。年のころは十才ほどで、實際にはまさしくついこのあいだ十才の誕生日を迎えたばかりだ。年相応に小柄な体つきをしている。ゴブリンとどっこいどっこいといったところだつた。もちろん体格では比べ物にならない。倍まではないが、ゴブリンと少年の腕のたぐましさにはそれに近い差があつた。

「じつそり見つからないように帰ればいいのに……」

不満そうに言つるのは、栗毛の髪をサイドで結んだ少女。同じ年ごろに見えるが、上背は隣の少年よりもある。このころの男女なら生まれが同じでも女の子のほうが成長がはやいのが一般的だが、彼女はそれに加えて少年より一つ年上だつた。

一人は村で隣同士の家に住んでいる。両親たちは互いに仲がよく、日々を仕事に追われる手間を少しでも軽くするために、二人は姉弟のように一緒に育てられていた。

「なんだよ、ジーヤ。あんなやつがうろついて、村まで来たら危ないじゃんか」

「迷いゴブリンでしょ。来たりなんかしないわよ」

ジーニアスというのが本来の名前の、その愛称で呼ばれた少女は半眼で答えた。

生まれたその日から一緒にいるこの男の子に、彼女は自然と姉としての気分を抱いている。向こうみずで考えなしのカリュをこなめるのは、いつでもどこでも彼女の役目だった。

「そんなのわかんないだろ」

口を尖らせる弟分に彼女は言った。

「村まで来るなんていうのだって、わからないでしょ」

それに、と続ける。

「もし村に近づいてきたりしたら、その時はお父さんたちがどうにかしてくれるもの」

「どうにかってなにや」

「追い払ってくれるってこと」

はぐれモンスターの扱いくらいであれば、村の大人なら誰でもわきまえている。そうでなければ村を成り立たせることなどできなかつた。

「父ちゃんたちが村にいなかつたりひとつすんだよ。あいつがいつも村に来るなんてわかんないのに。ここで見失つたら、あいつ、応援を呼んでたくさんでやつてくるかもしれないぞ」

ジーネイは大きく息を吐いた。

昔はあんなに素直だったのに、日に日に口ばっかり達者になるんだから。チビな背丈を少しでも伸ばしてこちらをにらみあげるカリュをにらみかえすが、強情な彼女の弟は退こうとしない。もう一度

ため息をついて、ジニーは遠ざかぬつむぎのゴブリンの後ろ姿に視線を移した。

「」のままどこかに行ってくれるのなら問題ない。今の季節は森の実りも豊富だから、モンスターが村までやつてくることはほとんどありえない。

ただ、もしカリュの言つとおりだったら？　ゴブリンの向かう先は森を通る細道で、それはそのまま村まで続いている。あのゴブリンは村の様子を見に来たのかもしれない。もしかしたら、味方の襲撃に先駆けた偵察のような役目だったりするかも。

いずれにしても、村の大人に知らせる必要があった。ジニーは決断した。

「カリュ。あたしがあいつの後を追うから、あんたは森を先回りして村に　つて」

彼女の言葉をきかず、少年はすでに足を踏み出している。

「こり、カリュっ！」

大声をだしてしまいそうになり、振り返ったカリュに人差し指でしーっと合図されてしまう。

あわてて、ゴブリンの様子をうかがい、なんとか氣づかれていないことを確かめて、ジニーはカリュのあとを追つた。服をひっぱつて押しどどめる。

「もう、勝手に一人で行こうとしないで」

「大丈夫だよ」

なにが大丈夫だ　　言いかけて、相手の自信満々の表情を見たジニーはいつぺんに文句を言う気がそがれてしまう。ほんと、馬鹿なんだから。全然よわづちいくせに。

「……無茶しちゃダメだからね。あたしが逃げるって言つたら、絶対逃げること」

「わかつてゐるよ。大丈夫、俺たちならやれるって」

「はいはい。じゃあ、こつもの場所の近くまで後をつけて、仕掛けるのはそれからよ。もしこのまま村から離れるようなら、それでおしまい。いい？ ちゃんと約束して」

「わかつてるつてば。いいからほら、魯レリづぜ。見失つちやつ
「ほんとにわかつてるんでしうねえ」

ひそめた声でやりとりを交わしながら、一人は追跡を開始した。

ゴブリンは森の街道を出たり入ったりを繰り返しながら、少しづつ彼らの村のある方角へと向かっていた。街側ではしっかりと整備された道も、半ばを過ぎて村に近づくほどに小道といつていよいほど自然にとけこんだものになる。ゴブリンと鉢合戦をした誰かがいまだにあらわれていないことは幸運といえた。

二人の違うゴブリンの動きはふらふらしていて、ジニーは相手の目的を読むことができない。やはりただのさまい者のように見えるが、周囲を探索しつつ村に向かっているようにも思えた。

勘ぐりすぎているかもしれないと考えたが、ゴブリンが村に近づいていることは確かだった。

ちらりと隣を見れば、自分の判断を誇るようにこちらを見る眼差し。むむっとしたが、そこでなにか言つのもなんとなく負けたような気がして、かわりにジニーは言葉を短く告げた。

「……しょうがない。やうつ」

「やたつ

ぱあつと満面の笑みを咲かしてガツツッポーズ。昔からなにも変わらない、子どもっぽい反応に口元をゆるめかけたジニーは、あわてて表情をひきしめた。

相手はゴブリン。たつた一匹とはいえ、子ども一人が立ち向かうには危険な相手だ。連れが考えなしですぐ特攻してしまいうような性

分である分、彼女は普通以上に慎重になる必要があった。

村の近くにはモンスターの襲撃に備えて、色々と仕掛けがある。村周りの掘りや柵といった直接、相手を防ぐものに加えて、森のいたるところに張られた早期警戒のための鳴り物もそうしたもののがつだつた。

なかにはもっと積極的に、相手を撃退するための仕掛けもある。彼らはいつものように、それを利用するつもりでいた。

「それじゃ、あたしが仕掛けるね」

「なんでだよ」

一気に不機嫌に転んだ声でカリュが異を唱えた。

「だつて、危ないじゃない」

「だから、なんで危ないことをやるのがジーイなのさ」

「そんなの。あたしがお姉ちゃんだからに決まってるでしょ」

見上げてくる視線に向かって彼女は当然とばかりに言い切った。しまつたと思った。彼女の目の前で、きつと相手の眉がつりあがつた。

「そんなこと、知るもんか！」

「ちょっと。大きな声ださないで」

「俺がやる、俺は子どもじゃないんだつ」

「わかった。わかったつてば。もう、なにかあると大声だすのやめてよ、子どもみたい」

「また言つた！だから、子どもじゃないって　」

「あーもうー　うるさいーー」

カリュ以上の大声でジニーが言い返した。

「そんなんだから子どもだつていうんでしょうー　バカ！　バカリュ！」

「子どもじゃない！　かけっこだつてもうジニーよつはやいんだからなつ」

「ふんだ、腕相撲じやあたしより弱いくせにー。」

「うるさい！ 怪力おんなー！」

「なんですつてえー」

がさり。

森の茂みを揺らした物音に、ぴたりと言い合いがとまる。

二人はそつと自分たちの頭上を見上げた。そこにいつからか影が覆っている。影をつくりだした相手が、感情のない真っ黒い瞳で二人を見下ろしていた。

近くで見ればさらに恐ろしげなその顔つき。水気を失つてひび割れた皮膚の細部まで見ることのできる近さにあって、二者のあいだに不自然な沈黙が生まれた。

かちや、となにかが擦れる硬い音を耳にした瞬間、カリュはジニーの身体を突き飛ばしていた。

「逃げろー。」

吐いた息を反動にして、自分も後ろに飛び。二人のあいだを轟音を立ててなにかが振り下ろされた。

重さのある砂を噛む音。鈍色の凶器が短い草の生えた地面を叩いた。

持っていた棍棒で一人を打ちつけようとしたゴブリングが、奇襲に失敗して不服げに歯をむいた。口元からしたたつたよだれが糸をひいて落ちた。

しづくが地面に落ちるその様子までしっかりと目とらえて観察していたカリュは、その奥の光景に顔をゆがめた。彼に突き飛ばされて難をのがれたジニーが、目の前の出来事に呆然としたままでいる。

逃げろって言つたのに、馬鹿ジニーー！

彼女に気づいたゴブリンが腕を振り上げようと力を込めるのを見て取つて、カリュは腰に巻いた小物袋へ手をつっこんだ。手ごろな大きさを探り、そのまま握り締めて、思い切り投げつける。

適当に掴んで放つたつぶての幾つかがゴブリンの顔面を直撃した。目のあたりをおさえ、苦悶の声をあげて暴れるモンスターの前を身を屈めて横切つて、カリュはへたり込んだままのジニーを強引に引き起こした。

「立つて！」

叱責に、はつとジニーの目の色に力が戻つた。うなずいて立ち上がつた拍子に手にしていた木のかごを取り落とす。中に入っていた木の実が盛大に地面に散らばつた。

「あつ」

「そんなのいいから！ ほら早く、いくよ！」

手のひらをしつかと握り締めて走り出した。掴んだジニーの手が震えている。あるいはそれはカリュのものかもしれなかつた。

「カリュ、『め』」

「俺がおどり！ ジニーは隠れて！」

謝罪の言葉にかぶせて一方的に告げたカリュの台詞に、幼なじみから不満の声はなかつた。

背中に遠吠えじみた奇声を受けて、カリュは肩越しに後ろを振り返つた。

怒り狂つたゴブリンが、頭から湯気をふきだしそうな形相で彼らを追いかけてきている。恐怖に口元をひきつらせ、それを無理やりに笑みのかたちに曲げて、カリュは大きく笑つた。

「わは！ きた！」

真っ直ぐ走るのは危ない。直感的にそう判断して、即座に茂みに

突つ込んだ。顔や腕に突き刺さる小枝を払つて、さらに茂みの深い方向へと飛び込む。

街道から脇へ入り、奥へ。さらに奥へと向かう。

彼にとつては慣れ親しんだ森だつた。こつちに行くべきだ、あつちの方には行くべきじやない。理屈ではなく体感として肌に感じながら、やがて大人でも十分に身を隠せるほど大きな茂みを見つけたカリュは、ジニーの身体をそこへ押し込んだ。

身を乗り出してなにか言いかける幼なじみの口を閉じて、しつと合図する。遠くからかきわけて近づく物音に鋭い視線を向けて、ジニーをその場に隠して一人で走り出した。

走りながら、小物袋からまたつぶてを取り出して物音のしてきた方向に投げつけた。適當だつたので相手に当たつてくれるとは思わなかつたが、悲鳴と、怒りの咆哮が森に轟いた。

「こつちだ、こつち！」

あえて大声で自分の位置を宣伝しながら駆けるカリュの言動には意図がある。

幼なじみから注意を引きつける必要があつたし、なによりおとりである彼には相手が追いかけてきてもらわなければ困るのだつた。

追いかけっこに興じた時間は長くない。

このあたりの森のことなら、カリュはほとんど知り尽くしている。自分が走りやすい場所、相手が追いかけにくい道を選び、それでいて完全には撒いてしまわない距離感をたもつたまま、目的の場所へたどりついた。

一見するだけでは、そこは他と大差ない場所に見える。

伐採して生まれた小さな空間。苗床に朽ち果てた切り株に刻まれ

た印でこの場に間違いないことを確かめ、微妙な立ち位置を調整しながら、懐に手を入れた。

取り出したのはつぶてではなく、一本の紐だつた。使い込まれ、ところどころから纖維のはみだしたそれは、カリュの母親が手すから編みこんでくれたものだ。

紐の長さはカリュの腕ほどもある。真ん中のやや広くふくらんだ部分に、カリュは大きめのつぶてをあてがつた。

折りたたみ、紐の両端を手にもつて、つぶてが落ちないように気をつけながら大きく振り始める。はじめは腕全体で、おもりにかかる力で拳動が安定してからは、手首のスナップだけで。

ひゅんひゅんと鋭く風をきりながら、先端におもりをのせた紐が少年の頭上で円を描いた。

茂みが揺れた。

唸り声をあげ、やぶからゴブリンが姿をあらわす。モンスターが一步を踏み出す前に、カリュは右手につかんだ紐、その片方だけを離していた。

伸びきる紐に導かれ、直接投げつけるのとは比べ物にならない速度でつぶてが飛んだ。

スリングガー。投石器は獵師を生業とするものにとつては馴染み深い武器である。習熟にひどく手間がかかるのが難点だが、弓を射る力のない子どもにはおあつらえ向きといえた。

放たれたつぶてはゴブリンに当たらず、その横の木に弾けた。軽くない衝突音がして、幹に決して小さくない痕がのこる。

「
げ

うめいたカリュの思いを読んだように、ゴブリンがぞろりとした牙を見せた。人間にはとても笑っているように見えない、いびつな笑顔だった。

利点の多い投石器ではあるが、難点も多い。習熟の難しさに伴う命中精度の問題は「」覧のとおりだが、この場合は連射が効かないといつ点がさりに重要だった。よつするに、近距離用の武装ではない。

少年の手から武器が失われたことを見て取ったゴブリンが一気に突進してくる。

それに対したカリュも同じく笑った。

カリュの前の地面には仕掛けが隠されている。布を張り、土と草で覆った落とし穴が大口をあけており、そこに落ちた先には、先端をどがらせた木が無数に上向いているのだった。

情けない悲鳴をあげて、ゴブリンの姿が消えさせる瞬間を待ち構え、しかしカリュの予想に反してゴブリンは罠の直前でぴたりと動きを止めた。

手にした曲剣で地面をさぐる。布がめくられた。

鼻を鳴らしたゴブリンがカリュを見る。どこか得意げなような表情だった。

「……慎重なやつだなあ」

「

相手がふがふが言うが、ゴブリン語の素養のないカリュには理解できない。

上辺だけの会話は続かず、ゴブリンが落とし穴を迂回して迫ってくる。あわててカリュはさがり、大木の後ろへと退いた。

大人が三人で囮まなければならないほどの老木にとつかかりをつけ、足をかける。身軽さはカリュの身上とするところだった。あれよあれよといつうちに太い幹を登りつめていく。

「！」

下からゴブリンが吠え立てるのを見下ろしながら、さてどうしたものかとカリュは思案した。

落とし穴がばれるというのは想定外だつたが、こうしたときのための備えがないわけではない。具体的には、残してきたジニーの存在がそれだ。

彼女はおそらく、今ごろは村に戻っているだろう。それなら、話を聞いた大人たちがやつてくるのを待つのが一番だつた。

日頃、よく勘違いされているように思うのだが、カリュは決して自分のことを無謀だとかいうふうには思つていなかつた。やれることがやれないことくらいはわきまえているつもりでいる。

ちびの自分がモンスターに一対一で勝てるとは思わなかつた。必殺の罠があつけなく見破られた以上、情けないが大人の助けを待つべきだとわかつていた。

ゴブリンは木登りが得意ではないようで、うなつたり手をかけてきたりはしているが、本腰をいれて登つて来る気配はなかつた。着込んだ防具に手をかける様子がないことでそれは判断できた。

森の中で太陽の位置はわからないが、日が沈むまではまだしばらくあるはずだつた。さて、それまでに助けが来るか、下のゴブリンがあきらめてくれればいいんだけれど、後者の場合、もちろんカリュはその後を追いかけて、別の罠まで案内してやるつもりでいた。

そんな算段で、木の上に追いやられたカリュだが、決して気分は暗くなかった。のだが、続いて響いた悲鳴のような声に、顔面を蒼白にする。

「カリュ！」

木々のあいだからジニーがあらわれていた。

その背後に大人たちの姿がない。彼女は村に戻らず、カリュたちを追いかけてきたのだった。

「逃げる、ジニー！」

ジニーは動かない。

新しい獲物に振り返ったゴブリンをにらみつけて、彼の幼なじみはそこから一步もひこうとしなかった。真っ青で震えているのが遠くからでもわかるが、腰が抜けているわけではない。それがカリュにははつきりとわかつた。ジニーは、自分を助けようとしているのだ

ジニーが大きく手をかざした。なにかを受け止めるよひひろげた両手がゴブリンへと向けられる。

「ふあいあー！」

力ある言葉に呼応して、虚空に炎が生まれた。

ジニーは魔法使いである。生まれながらの才次第ではどんな天変事象をも可能にするような、ただの村人には珍しい才能をもつていた。

とはいえるものの訓練も受けてはいない、見よう見まねの魔法ではあった。大気に満ちたある物質を媒介に生み出されたものは、炎と呼ぶのもおこがましいほどのはのひ弱さしかもちあわせていない。ひょろひょろと風に流されるようにして目標に向かつた火の玉以下のそれは、ゴブリンの胸當てにぶつかっても焦げ目ひとつ残すことはなかつた。

氣まずい空気が流れた。

むしろモンスターのほうが申し訳なさそうな案配ですらあつた。

「 ッ！」

場を仕切りなおすようにゴブリンが吠えた。声にあてられたジニーの腰がくだける。

カリュはすばやく周囲に目を配つた。今から木をおりていては間に合わない。老いた木にからまつた薦を見つけて、手早く引き寄せ

てちぎつた。軽く体重をかけて丈夫さを確かめると、そのまま一気に木上から飛び出した。

目算もなにもあったものではない。やはり少年は無茶な性格だつた。

しかしそんなことはどうでもよかつた。いま、カリュの頭のなかにはひとつのことしかない。ジニーを助ける。どうやって？

こうやって！

薦を手にして勢いよく滑空。

斜めに弧をえがいて、少年の身体は空を泳いだ。

いくら子供もとはいって、全体重をかけられた鳶が耐えきるかなどわかつたものではない。途中で千切れないとしても、なにしろぶつけの行動である。シミコレー・ションもない。

一本の鳶を頼りに飛び出して、自分の身体がどのように運ばれるかという計算があつたわけでもなかつた。そもそも、そのために必要な知識がない。ただ、鳶にぶらさがつて飛び出した先に運良くモンスターの姿が近づいてくる幸運を、カリュは普段あまり熱心に祈つたこともない神さまに感謝した。

「ジニーに、手をだすなあああ

鳶を持つたまでは、直接ゴブリンにまでは届かない。加速の最下点を越え、視点が上向いた瞬間に手を離して、そのまま宙を舞つた。

横合いから体当たり。「ゴブリンと一緒にたにもつれた。受けた衝撃は大きかつたが、不意をつかれなかつた分、カリュのほうがダメージは軽減されている。地面を転がつてなんとか受身らしいものをとり、ふらつきながら立ち上がつた。

「カリュ！」

駆け寄ってきたジニーは涙目だった。

「バカ！ なんで村に行かなかつ

「たんだ、と言い切ることができなかつた。わきばらに衝撃を受け、カリュは痛みを感じる前に身体ごと吹き飛ばされていた。

息が詰まる。全身がしごれて受身を取れず、顔をこすりながら地面を滑つた。土のにおいをかぐことがなかつたのは、呼吸 자체ができないからだつた。遅れて響いた激痛に身悶える。

「カリュ！」

涙にぬれた視界に、自分に駆け寄る幼なじみの姿が見えた。その後ろに、奇襲を受けて平然とした顔のゴブリン。

「カリュ、カリュ！」

助け起されたながら、いまだに呼吸はととのわず、息もたえだえにカリュはジニーに告げた。

「……火、出して」

「はやく　はやく逃げよ！」

「だせ！」

びくりと肩を震わせたジニーが、目を閉じた。ぼうっと頬りげのない火の玉が生まれた。

それを見たゴブリンが愉快そうに歯を鳴らした。速度もなければ威力もない。追い詰めた獲物を前にして、完全にあなどった態度だった。

上等だ。歯を食いしばり、カリュは立ち上がる。ふらりとよろけそうになるのを横から支えられ、つっけんどんに突き放した。

「ジニーは村について」

「カリュ……」

「大丈夫」

にやつと笑う。完全にまるつきり、ジニーからじつみても強がりでしかない笑みだった。

「戦利品、持つて帰るからや。　できれば誰か呼んできててくれたら嬉しいけど」

はつと気づいた様子で、ジニーが唇を噛み締めた。うなずく表情に後悔の影がさすのを吹き飛ばすように少年はもう一度笑った。

「ほり、いつて！」

言いながら、自分はゴブリンにむかって駆け出した。

手には取り出したつぶでがいくつか。腰の袋はすでに空っぽで、弾はいま握った分だけで全部だった。

予備動作が必要なスリングガーは使えない。痛みのある身体では投てきも満足にできやしない。いや、たとえカリュの五体が満足でも、たかたが子どもの力で投げつけた石ころでは、よほど幸運に恵まれない限り相手を昏倒させることはむずかしかった。

そんなやぶれかぶれに、命を賭けるわけにはいかない。自分のものだけならまだしも。今はまだ、すぐ近くにジニーがいるのだから。

少年を迎え撃つようにゴブリンが棍棒をかまえる。その途中、ふよふよとたよりなく宙をいく火の玉が見えた。相手との直線上にあつて邪魔なそれを、カリュは虫を払うようにあいた左手で握りつぶした。

貧弱とはいえ、火である。てのひらに激痛が走った。視界がにじむ。

しかし、ぬぐえば敵が見えなくなる。目を閉じれば隙ができる。だからカリュは涙を流しながら歯をくいしばってその痛みに耐え、渾身の力で右手を振りかぶった。

つぶてが放たれる。

ゴブリンはあっさりと盾で防いだ。

棍棒での反撃。大上段からの打ちおろしで振り下ろされる。ぎりぎりのところで避ける。手持ちの武器を使い果たしたかに見えたカリュは、そこからさらに踏みこんだ。加速して飛び上がる。右手に残つたつぶてはない。徒手で殴り合おうといつ無茶でもない。それよりはもう少しだけ、ましな考えだった。

武器ならまだ残つている。

それを、カリュはさきほど手に入れたばかりだった。

重い棍棒で地面を打ち、前のめりにゴブリンの頭がさがっていた。もともと小柄なこともあり、その顔面はカリュの身長でも手が届く範囲にあつた。

カリュは腕を振るつた。

振るわれたのは利き腕でもなければ握りこぶしでもなく、掌ていのふうになつてゐるのは、拳が傷むのを避けたからでもなかつた。手のひらに包んで燃える火の玉以下のそのかたまりを、カリュはゴブリンの目めがけて押しつけた。

耳をつんざくような悲鳴がほとばしつた。

貧弱とはいへ、火。生木を燃やすどころか、枯れ木相手の火種にもなりそうにないそれだつたが、さすがに目にぶつけられてはただではない。

とはいへ、ダメージは期待できない。せいぜいびっくりさせて、ひるませるくらいが関の山だつた。

息をつく間も惜しみ、カリュは無防備に急所をさらした相手の股間を蹴り上げた。

今度こそ痛みによる悲鳴。右手の武器をとつおとして、ゴブリンはその場にうずくまつた。

地面の棍棒を遠くに蹴り飛ばし、カリュはすぐそばに垂れ下がつた薦をつかんでゴブリンの足に結んだ。その腰に短剣を見つけ、手を伸ばす途中でゴブリンが腕を振るつた。

片腕でなぎ払われ、じろじろとカリュは地面を転がる。

「へへっ

立ち上がつたその口元に笑み。手には間一髪、ゴブリンの腰から手に入れた短剣が鞘ごと握られている。

「へへっ

「やだよ。返してほしければ、かかつてこいよ

憤慨した形相に挑発した口調で応えながら、ちらりと背後の様子をうかがつた。

ジーライの姿はない。森をいく足音も聞こえない。

よし、とカリュは安堵の息を吐いた。これで最低限、果たすべき目的はクリアした。

さあ、どうする。逃げる？ それとも

胸中の問いに、少年は無言で鞄から短剣を抜き拵つた。

「おのじよの」

不意に響いた言葉に、ぎょっとカリュは周囲を見渡した。
誰の姿もない。声ももつない。幻聴か、と思つたといふで、ゴブリンが吠えた。

「！」

突進してくる。少年の油断をついた格好だが、数歩走つたところで結われた薦につんのめつた。

態勢を崩したゴブリンの隙を見逃さず、カリュは飛び掛つた。
腰だめにかまえた短剣で、身体ごとぶつかる。

狙いはずれようがなかつた。胸当ての脇をねらつた短剣の刃がモンスターの身体に突き刺さる。

しかし、それでもその一撃は、致命傷にはほどとおい深さでしかなかつた。

「！」

至近距離で振るわれた拳がカリュの身体を吹き飛ばした。

意識がどびそうになるのをこらえて、身体を起こす。張られた頬が熱かつた。口の中に血の味が広がっている。手には短剣がなくなつていた。

「おうかでもある。連れの逃げる時間をかせぐのが目的だったはずなのに、どうして逃げださんかった」

再び、声。今度はカリュは意識を揺さぶられなかつた。

幻聴か、あるいは森で人間を惑わすという妖精のささやきか。確かに耳に聞こえるその声を無視した幼い眼差しは、一心に目の前のモンスターに向けられている。

怒り心頭のゴブリンが、自分の血に濡れた短剣で薦を切り落つた。

さあ、どうする。

あやしく響く声とはなんら関わりなく、この場に至つて、逃げ出すという選択肢はカリュにはなかつた。

畏はばれ、武器はつき、目の前には傷ついてなお強大な敵が立つ。それでも自分を奮い立たせるものがなにか、カリュはふと不思議に思ったが、深くは考えなかつた。

身体の奥に熱いなにかがたぎつている。それをなんと呼ぶものか、知つてゐる気がした。

父が、祖父が言つていた。
なにがあつても、それだけは決して失くすなど。
女を守る。モンスターと戦う。男が男であるために必要な、その偉大な感情の名は

「あほう。そんなものは勇氣といわん。蛮勇といふのよ」

声に、わずかに怒氣がこもつたように聞こえた。

ゴブリンの咆哮。

カリュも雄たけびをあげて応えた。今度こそなんの策もない徒手空拳。握った拳でゴブリンに立ち向かい、その目の前で、不意にゴブリンの全身が火を噴いた。

「……っ、……！」

火柱が荒れ狂い、熱氣がカリュの髪を灼ぐ。

やがて火が収まつたあと、声もなく崩れ落ちたゴブリンは完全に炭化してしまつていた。皮膚を焼く程度ではない。ジニーの生んだものとは比べようもない、圧倒的なまでの火力。

ぞつと身を振るわせたカリュは、見知らぬ何者かが立つていることに気づいた。

麻織りのローブに身を包んだ、旅人の装いをした人物だった。フードに隠されて顔までは見えなかつたが、流れるような銀髪と浅黒い肌がのぞいている。声で女性だということはわかつた。

「あ、ありがとうございます」

冒険者。魔法使い、本物の。恐れと感謝をないまぜにして頭をさげるカリュに、その女性はふんと鼻を鳴らした。

「ぬしゃあ、こんなことをいつたい何度もくりかえしておるのかよ」「え？」

質問の意味がわからず、きょとんとする。苛立たしそうな舌打ちが聞こえた。

「……まあいいわ。このあたりで腹に怪我をした女を見んかつたか？」

？ 竜でもかまわん

竜。そんな大層なモンスターなど、見たことがあるはずがない。激しく首を振るカリュに、女性はならどうでもいいとばかりに背中を向けた。

「はよう帰れ。女を泣かすな。せつかく助けてやつた今生ぞ。ありもしない頭で考えられるなら、次に捨てるときはもう少しマシに扱うがいい」

言い捨てて、女性は森の奥へと消えた。

残されたカリュはしばし呆然と女性の消えたやぶを眺めて動けずにいた。

緊張がとぎれたせいで頭が働かない。

どうやら命拾いをしたらしいという実感も沸かず、全身には奇妙な空虚感があった。敵を倒したのは少年ではないのだから、それも当然かもしかつた。

どれほどのあいだそうしていたか。

自分の名前を懸命に呼ぶ声を遠くに聞き、カリュはようやく茫然自失の状態から回復した。

ジニーの声だった。大人たちもいる。村から助けがやつてきたらしかつた。もう、その必要はなくなつてしまつていたが。

村の方角へのろのろと歩きはじめ、その途中で思い出したようにゴブリンを振り返つた。

モンスターの死骸は完全に消し炭と化してしまつてゐる。戦利品など手に入る様子ではなかつた。

そのことに残念さをおぼえるのでもなく、カリュはその場から離れてジニーたちとの合流をはかつた。

もう一度振り返る。執着はゴブリンではなく、そこで出会つた旅人、正確にはその言い放つた台詞に残つていた。

ほどなくしてジニーに引き連れられた大人たちと合流したカリュは、さんざんに叱られた。

父親がわりのジニーの父親から思い切りどつかれ、村に帰つたら親父さんからもつと殴つてもらえとおどされてげんなりとなる。

しかし、村の人たちはカリュの身を察じてのことだつたから、それがわかるカリュは「めんなさい」と頭をさげるこことしかできなかつた。

彼が一番対処に困つたのはジニーだつた。

涙をいっぱいにためて抱きついてくるジニーをもてあましながら、カリュは危ないところを冒険者風の相手に助けられた事情を大人たちに話した。

今日、カリュが出るまで、村にそうした冒険者は来ていなければだつた。自分がいなあいだに訪れたのかと思ったが、大人たちはそんな人物は宿にも来ていないと。

ということは、これから来るのか。それとも近くに寄つただけかもしれない。

寄つてくれればお礼をするんだがなあ、と残念そうな大人たちに囲まれて護られながら、カリュとジニーは村への帰路についた。お礼。そう言われて、それならまた話ができるかなと考える。もちろん、当の本人がまずお礼を言わないといけないのだけれども。しかし、カリュにはそういうことにはならないような気がしてならなかつた。

もう自分はあの人と出会えないという予感があつた。

理由はない。なぜそんなふうに思つのかもわからなかつた。勘といつしかない。

そして、それを残念とも、やはりカリュは思わなかつた。

頭ではさきほど聞いた台詞、そのなかの単語が強く残つている。

竜。

竜が、いる？

村に帰つて父親からげんこつをもられたあと、カリュは涙目でふたたび森にもどつていた。

みんなを心配させた罰として枝拾いを命じられたのだった。ついでにジニーが落としたかごも中身ごと拾つてこいといわれている。

一緒に怒られるべきのジニーは一言も怒られず、村で家事の手伝いをするように言われていたから、これは絶対にジニーひいきだとカリュは思うのだが、ゴブリンを一人で追いかけるようにいつたのは自分だったから文句はいえなかつた。

近くにはまだはぐれモンスターがいるかもしれなかつた。本当にあがはぐれであったかどうかもわからない。村の大人たちは手があいたもので森に見回りにでていた。

モンスターがふらついているかもしれない状態で森にいかされるのは、カリュ一人であればすぐなくとも逃げ出すことはできるとう信用であるはずだつたが、当の本人はそうは思つていなかつた。どうせ怖い目にあえばいいと思つてるんだ。ふてくされた気分で考へる。

痛みをかんじて見おろした左手には包帯がまかれている。ゴブリンと対峙したとき、ジニーの放つた火の玉をつかんでできた火傷は、母親の手から薬草をぬられていた。

包帯をまきながら眉をひそめて黙つていた母親の表情を思い出し、なんともいえない罪悪感におそわれる。

仕方ないじやないか、とカリュは内心で言い訳をはじめた。

ほかに武器がなかつたんだ。ジニーが逃げ出す時間をつくらなければならなかつた。ジニーをまきこんだのはたしかに、自分だったのだから。

だから、手でにぎりしめたくらいでは消えないとわかっている火の玉をつかって、ゴブリンの顔面にぶつけてやつた。べつにつくりたくつてつくつた傷じやない。必要だつたから、そうしたんだよ
脳裏にうがんだ母親の顔は、悲しげなままにも言わない。実物と同じだった。

カリュの母親はいつも、彼が怪我をして帰つてきてもなにも言わなかつた。ただ黙つて、自分がその怪我をして痛いような表情で治療をしてくれる。

その顔を見るたびにカリュはもうしわけない気分になる。
けれど怪我をしたのにはいつだつて理由があつたから、でもそれを口にしたつて母親の表情がかわるわけではないこともわかつていつから、カリュも黙つて手当てをつける。

しうがなかつたんだよ。口にできなかつた言い訳をカリュは続ける。男なら言い訳をするなど父親からきついわれていたから、彼はそれをぐつと我慢していた。

びひじて逃げ出さんかつた。

無言のままカリュを非難する想像の母親にかわつて、声がひびいた。

顔もおぼえていない（ローブに隠れてほとんど見えなかつたから、当然だつた）魔法使いの言葉。まるで彼の母親の気持ちを代弁するように、声がいつた。

そんなものは勇氣といわん。奮勇といつのよ。

むずかしい言葉はよくわからなかつた。

あの時、カリュはなにを考えたわけでもなかつた。火の玉をつかった奇襲が成功して、そのあと。

たしかに逃げ出すことだつてできただらう。カリュは逃げ足に自信があつた。ゴブリンを足止めして、そのまま村にかえつて大人たちに助けをもとめることもできたし、べつの罠のところにつれていくのもいい。

それをしなかつたのに、理由があるわけではなかつた。

なんとなくそうするべきではないのかと思つた。カリュの心でなにかがささやいた。そうとしか思えないほど自然に、身体が勝手にうごいていた。

あの魔法使いは、まるでそれを怒つてゐるような口ぶりだつた。

……よくわからない。よくわからないし、不満もいっぱいだつたが、それで母親に悲しそうな顔をさせてしまつたのはそのとおりなので、そのことをカリュは反省した。

次はうまくやろう。罠も、逃げ方も。

ああ、ゴブリンくらい、格好よく正面から倒せるようになりたいなあ。

ちびで非力なカリュは考える。彼の腕はほそくて、「」をひく」とも剣を振ることも満足にできなかつた。子どもでもモンスターを倒せるのがスリングガーナの強みだが、十分に重さと速度をのせるチャンスは早々あるわけではない。

それか、魔法とか。

さつき見たばかりの光景をおもいだし、カリュは全身をあわだてた。恐怖と興奮が一氣によみがえつた。

天をつき、そのまま森を燃やし尽くさんとする炎の柱。それでいてゴブリンだけを正確に燃やし尽くしたあれこそが、まさに魔法の業というべきしろものだつた。

幼なじみの放つたような、手につかめる火の玉なんて比べ物にならない。

魔法さえ使えば、非力かどうかなんて関係ない。カリュは熱望

してやまなかつたが、どうあがいても無理な願いでもあつた。魔法とは生まれながらにして、素養のあるなしがはつきりしているからだつた。

どうして自分は魔法をつかえないんだらう。

昔はそのことを怨み、悪くもない両親に泣きながら文句をいい、素養のある幼なじみをねたんだりしたこともあるカリュである。いまでは使えないものは使えないんだからしようがないさ、と半ばあきらめの境地にいるが、それでも実際に目の前の魔法のすごさを見せつけられてしまつと心が揺れる。

ちよつとした場面をカリュは想像する。

突如、村に迫りくるモンスターの大群。領主からの援軍はなく、村は大人たちが懸命にあらがうが、敵の数は視界をうめつくすほどに多い。

誰もが絶望したそのとき、モンスターの一群が火に包まれる。

突然のこと驚き、周囲を見渡すモンスター。それを見下ろして、颯爽と登場する自分　　そういう子どもっぽい空想だつた。

八面六臂の大活躍を思つままに頭のなかにえがきながら、森をいくカリュはやがてゴブリンと遭遇したあたりにたどりついた。彼らが隠れていったやぶのそばに、見おぼえのあるかごが転がつている。

その近くには、ジニーと一人で午前中に拾い集めた木の実や、染色や小物作りに使える拾得物があつて、赤色のなにかがもぞもぞと動いていた。

ぎょっと身体をすくめ、カリュは足を止める。
赤色のそれは生き物だった。

モンスター。小さい。翼が見える。トカゲを少し大きく、丸くしたようなその姿かたちについて、カリュは見たことはなかつたが、話に聞いたことがあつた。

「ドラゴン……？」

それは神話のおとぎ話や詩人の唄にてぐる、伝説のモンスターだ。

その羽ばたきが空をつくり、一吐きが火をうみ、こぼした涙から川がうまれたという。この世界をつくった存在と詠われる、それは想像上の生物であるはずだつた。

それが、カリュの目の前にいる。

もちろん、それがドラゴンであるといふ確証はない。見たこともないのだからあたりまえだつた。ドラゴンに子どもがいるなどという話も、聞いたことがなかつた。

カリュのつぶやきが聞こえたらしく、そのドラゴンらしき見かけの生物が振りむいた。威嚇するように口をひらく、その全身が細かくふるえているのにカリュは気づいた。

「怪我、してるのか……？」

「ぴぎやー。応えるように鳴いた声が弱々しい。

カリュはそつと近づいた。すぐ近くに見下ろしたドラゴンの腹から青い血が流れていった。

やはり怪我をしている。それなりに深い傷に思えた。ドラゴンの近くには食いかけの木の実が散乱していて、傷を癒す力をたくわえるために、食べ物をとろうとしているのだとカリュはわかつた。首をもちあげてカリュをにらむようにしていたドラゴンが、それさえもおっくうとばかりに地面に伏したのを見て、カリュは反射的に動いていた。

かごを拾い、そのあたりの木の実や葉っぱや木の皮を集める。そ

して、即席のベッドが作られたそのなかにドラゴンをかかえて寝かせた。

ぴー、とドラゴンは暴れたが、すぐに大人しくなった。

カリュはかごを揺らさないように気をつけながら走り出した。

向かう先は村ではなかつた。

ドラゴンは、モンスターだ。ゴブリンのよう人に襲うという話は聞いたことがないが、悪いドラゴンやその退治話は、子どもの頃から寝るときによく聞かされていた。

そのドラゴンの子どもを連れ帰つたら、大人たちがどんな反応をするか。決して歓迎はされないだろう。もしかしたら、殺されてしまうかもしれない。

そんなことをさせるわけにはいかなかつた。

大人たちに見つからず、ドラゴンをかくまえる場所におぼえがつた。

自分の命を救つてくれた冒険者。その去り際にかけられた言葉も頭には思いつかばず、カリュは懸命に手足をふつた。

カリュが訪れたのは村のはずれ、ひつそりとたたずむ木小屋だった。

一目するだけでたてつけの悪さがわかる。小屋はここに住む人間が誰の助けも得られず、一人で立てたものだった。

扉を叩く。

声をかけたが、返事はなかつた。かまわずカリュは扉をひき、室内に入った。

小屋のなかは薄暗かつた。

まだ日が落ちていないのに暗いのは、小屋の立地と設計に問題があつた。採光窓も閉められている。その奥、部屋の片隅に小屋の持ち主が壁に背を預けて座り込んでいた。

「ナオミ、大変なんだ！」

呼びかけられても、その相手はほとんどなんの反応も返さなかつた。顔を持ち上げてカリュを見る瞳に輝きがないのは部屋が暗いせいではない。

ナオミといつ名の茶髪の女がカリュの村を訪れたのは、一月ほど前のことだ。

怪我をして、服装はぼろぼろで、その表情にはまるで生氣がなかつた。村の人たちは彼女を歓迎しなかつたが、金を払われては宿にとめないわけにはいかなかつた。

陰気な女は、一週間ほど宿で身体を休めた。そのあいだ、誰かと言葉をかわすことさえなかつた。ぶつぶつとよく独り言をつぶやいていて、それがますます村の連中を不安にさせた。

やがて、ナオミは村のはずれに住み着いた。小屋をたてる彼女を手伝う村の者はいなかつたが、やはり文句を言う大人はいなかつた。ナオミと話す村人はカリュだけだつた。

というより、ナオミに話しかける村人がカリュだけだつた。ナオミのほうからはカリュに声をかけたこともなかつた。

カリュはナオミの秘密を知っていた。

以前、森で助けてもらつたことがあるからだつた。今日彼を助けてくれた冒険者のように、ゴブリンに襲われて危なかつたカリュは、ナオミがモンスターを一撃でほつむつさるところを見て、その見事さに心をうばられた。

ナオミは冒険者だつた。

本人の口からきいたわけではないが、ゴブリンを叩ききつた動き

はただの素人のものではありえなかつた。

世界を股にかけて旅をする冒険者が、どうしてこんな辺鄙な村にいて、一人で外れに住んでいるのか。聞きたいことはたくさんあつたが、ナオミはほとんどなにも言わなかつた。声を聞いた事も、ほんの数回くらいしかない。

今ではカリュのほうでも、無理をして事情を聞いたとはしていかつた。

そんなことをしなくとも、彼にとつてナオミが命の恩人であることは変わらないからだつた。友達だとも思つていした。そして、もつとも身近にあこがれる存在でもあつた。

ナオミはいつもやうじてこるよひ、部屋のなかで果然と暗闇を眺めているような表情だつた。かまわずカリュは続ける。

「水と、包帯あるつ？ 怪我、してるんだ？」

ナオミの反応はない。カリュは言つた。

「ドライロンなんだ！」

ぴくり、とナオミが震えた。

「ドライロン」

「そう、ドライロンー 森で見つけて、怪我してるんだ！ 水と、包帯をちようだい！」

ナオミがのろのろと起きあがつた。

近くの棚から布を取り出し、水入れの桶を持つてくる。

「ありがとっ」

礼を言つて、カリュは布を水にひたして、そつとドライロンの傷をぬぐつた。

ひきやー。

「「めん、「めん。ちょっと我慢してよ」

ドラゴンの苦情を聞きながら、血を綺麗にぬぐつて布を洗い、怪我のあたりに柔らかくおしあてる。止血の効果くらいはあるかもしれなかつた。

「どうしよう。ナオミって、回復魔法とか使えたりしない?」

カリュが手当てをする様子を黙つて見つめていたナオミは、小さく首を振つた。

そつか、とカリュはため息をはく。ナオミが魔法を使えるとは聞いたことがなかつたが、もしかしたらと思つたのだった。

回復魔法を使えるほどの魔法使いは少ない。村には一人もいなかつた。

ふと、カリュは脳にあつた魔法使いのことを思い出した。それと同時に、違つこととも思い出す。

「竜」

竜を見なかつたかと聞かれた。あの人気が探していたのはこのドラゴンのことなのだろうか。でも、近くには、他には誰もいなかつたけれど。

「竜」

繰り返すように、ナオミが言つた。

隣の彼女をあおぎみて、カリュははじめてナオミの異常な様子に気づいた。

それまではいつも、どんなことにも反応をかえさず、抜けがらのようだつたナオミが、食いつるような形相でかゞのなかのドラゴンを見つめている。

「うん。すごいよね。俺、はじめて見るよ」

はじめて見るナオミのはつきりした反応に嬉しくなつて、カリュは笑いかけた。

ナオミは声が聞こえない様子で凝視している。

その唇がなにかをつぶやいているが、カリュには聞き取れなかつた。

「……大丈夫かなあ。こいつ、怪我が深いみたいだけ」
伝説のモンスターといわれるドラゴンへ、どういった手当てが有効かなど知るはずがない。ドラゴンの体力に期待するしかなかつた。食べ物は、かごのなかにある木の実でよいだろうか。

「ナオミ。こいつ、ここだからまつてももらえない? 村だと多分、大人たちがうるさいから」

ナオミがカリュを見た。

あんまりにも見かけに気をつかつていなければ、髪を切つて櫛をいれて、綺麗な服を着ればナオミは絶対に美人だとカリュは思つていた。

だつてほら、すくまつげが長い。少し濁つたような半透明の視線を受けて、どきりとする。返事のないままにナオミはカリュから視線を外した。

それをカリュは了承であると受け取つた。

「それじゃ、よろしくね。俺、様子を見にくるから。パンかなにかも持つてくるね」

カリュはこれまでに度々、ナオミにそうした差し入れを持つてきていた。

ふたたびドラゴンに視線を向けたナオミに声をかけて、カリュは扉に向かつた。

村に戻るのが遅くては心配されてしまう。

かごはドラゴンの寝床にあてがわれているから、それをどうぞ」
イに説明しようか考えながら、カリュはナオミを振り返つた。

「それじゃ、またね! ナオミ」

返事をたしかめず、小屋から出ていった。

ナオミと呼ばれた女は、少年がいなくなつたあとも一人、じつとドラゴンを見下ろしたまま動かなかつた。

その唇がなにかをつぶやいている。

やがて、そこから伝播するように、女の肩や手、全身が震えだした。

なにかをつぶやき続ける、その表情に浮かんでいるのははつきりとした恐怖の感情だつた。

その夜。

カリュの村のまわりにひろがる森で火事が起きた。

夕暮れが一足はやく森にかけりをしのばせる。
村はずれにたつたほつたて小屋で、その小屋の持ち主の女はがた
がたと震えていた。

室内はほどんど夜のように暗い。

小屋の中央、斜めにかしいだ机のかごに横たわるもの。そこから
ほのかな光がたちあがっている。

苦しそうに腹を上下しながら、小さなドラゴンは呼吸をくりかえ
していた。

全身を発光させているのは、呼吸ごとに力をとつこんでいるから
だった。

マテルと呼ばれるこの世界にみちた力。ごとにでもあり、いくら
でもあるその源を、小さな生命体は身体の回復にあてている。
魔法ではない。そう意識するほどのものでもない。

彼らにとつてそれを活用する術は、呼吸すると同じくらい自然
に、生まれつきそなわっているものだった。

あたりまえだった。

なぜなら、彼らはマテルそのものだから。

震えながら見守るうちごとに、ドラゴンはますますその輝きをまして
きている。

赤色のマテルはドラゴンの属性をあらわしていた。
火の竜。力のサラマンテル。それはこの世界をつかさどる存在だ
った。

ちまたでは伝説としか噂されないが、それが実在する」とは冒険者たちのあいだでは常識だ。

彼らの目的は多くがその存在にあった。

たくさんの冒険者がそれを探し、それと戦つた。

ドライゴンに挑んだ冒険者の数はそのままそこで積み重なった死者の数にひとつし。

彼らは叫び、悲鳴をあげ、笑いながら命を散らせていった。

雪辱の呪いを吐き叫び、塵のようにあつさりと命を散らしていく。

それが冒険者という人種だった。

竜がそうした存在であるように、彼らもまたそういう存在だった。

女は違つた。

歯を打ち鳴らして恐怖におののくその目に過去の光景が思い浮かんでいる。

天をさき、地をくだき、海をわるその異能。

目の前に立つだけで魂ごと心胆をけずりとられるその圧倒的な存在。

頭をかかえて神の慈悲をとなえ、ただ周りの仲間が事切れる断末魔だけをきく。

気づけば女は逃げ出していた。

恐ろしかった。ただ恐ろしかった。

そうして流れ着いた村。すべてを放り出してたどりついたその逃げた先で、いま女の目の前にそれが横たわっている。

逃げ出すことなどできないのだ。絶望の気分で女はうめく。

そうだ、それはそうだ。だって、なぜなら、彼らはこの世界そのものなのだから

ドラゴンの視線がさまよい、彼女を見た。

口を開く。

ひ、と息をのみ、女はとびすさつて尻餅をついた。

ぴー。

灼熱の炎が吹き荒れることなく、かわりにか弱々しい声がないた。のろのろと立ち上がり、女はかごの様子をうかがった。

ぴー。またドラゴンがないた。はかない声だつた。

お礼をいつているようにも、助けをもとめているようにもきこえた。

女は呆然とそれを見下ろした。

信じられなかつた。

あのドラゴンがそんなか弱い声をだすことにして、耳をうたがつた。

ドラゴンと皿があつ。そこにあつたのは他者をみとめる視線だつた。

彼女を見下ろして蟻をふみつぶすように無機質な瞳を向けていた

あの生物が、自分を見あげている。

それは彼女のなかに凝り固まつた恐怖をやわらげるのに十分だつた。

女の頬を涙がつたつて落ちた。

なぜ自分が泣いているかわからなかつた。

そつと手をのばす。ドラゴンに触れた。

火竜の子は抵抗しようとしたが、その力がなかつただけかもしれない。だが理由はどうあれ、たしかに女はその身体にふれた。

温かい。

鼓動がした。

凍土の氷がとけるよしに、女のなかでなにかがくずれた。
ああ、そうか。

彼らも同じなのだ。そしてこんなにも違う。そう、違うのに、同じなのだから。

なら、自分だつてきつとこいつなれるはずだ。

女は笑った。

滂沱のごとく涙をながしながら笑った。喜びと悲しみがないまぜになつた表情だった。

しばらくして、室内を完全な暗闇がおおいつつんだ。

深夜、父親の手でたたきおこされたカリュは、すぐに異様な雰囲気に気づいた。こわばつた父親になにがあつたのかもたずねられず、村の外、寄り合いなどに使われる広場に向かつ。

そこにはすでに他の村人たちが集まっていた。

空をみあげたカリュは目をみひらいた。村の周囲、あちこちの方角が明るかつた。

「カリュ……」

ジニーがそばにやつてくる。寝起きだから髪がおりている。

不安そうに服のすそを掴んでくる幼なじみの手をにぎつて、カリュは大人たちの様子をうかがつた。

誰もが混乱していて、口にする言葉はどれも錯綜していた。カリュは村長の姿をさがした。

「みんな、聞いてくれ！」

声を張り上げたのは村長ではなく、若い村人でのリーダー各につている男だつた。

「森火事だ！ どうも一箇所じやないらしい！ このままじや森が危ない。風の吹き方によつちやあ、村も巻かれるかもわからん！」
ざわざわと村人がざわめいた。

「理由はわからん！ 今日、子どもたちがゴブリンを見かけたつて話もある！ もしかすると、モンスターの群れの襲撃があるかもしらん！」

いつそう強いざわめき。

大人たちがカリュとジーイを見た。

なかには非難じみた眼差しもある。昼間の出来事が、この事態を招いたのではないかと思っている相手がいた。

大人たちの視線から守るように、カリュはジーイを自分の背後にかくした。

「まだ間に合うようならだが、森をまもらんといかん！ モンスターの襲撃に備える必要もだ！ 男たちは一手にわかれてどつちかを頼む！ 女子どもは万が一のために、家の荷をまとめて避難の準備をしてくれ。それぞれの指示は自警団がとる。警団、班分けするから集まれ！」

大人たちが動き出す。

心配そうなジーイにうなずきかけて手を放し、男たちのあとに続こうとしたカリュは、父親の手で頭をおさえつけられた。

「お前はあつちだ」

父親がそうあいをしゃくつたのは、女子どもが集まりだしている場所だつた。

「俺、子どもじゃないよ！」

むつとして見上げるカリュに、無愛想で評判の父親は静かにうなずいた。

「わかつてゐる」

頭をくしゃりとして、

「お前はジニーを守れ。母さんを頼む」

まだ納得できない様子でいる息子に言った。

「男だらう」

「男だよ！」

父親の大きくて重い手を頭からふりはらい、カリュは言った。
小さく笑った父親が、ぽんぽんと頭を叩いてなでた。

「なら、頼むぞ」

「……わかつた」

不承不承、カリュは返事をして父親の背中を見送った。
ぎゅっと拳をこぎりしめる。

もつと背が大きければ。力が強ければ、ぼくだって
ぎゅっと彼の手をつつんだのはジニーだつた。

怖いだるうに、それを我慢している。必死に年上らしくあらうと
しているのだつた。

カリュは大人たちと一緒にいけなかつた残念な思いをおさえつけ
て、自分が父親にされたように幼なじみの頭をなでてやつた。
気が強くてしつかり者。だけど本当は怖がりな彼の幼なじみは、
泣きそうな表情で目を細めて、それをこまかすように強く手をこぎ
りしめた。すぐ痛かつた。

自分のできることをしよう。

そうカリュは自分に言い聞かせる。いつか父親のように背も伸び
て、手も大きくなるんだから。

今は隣にいるこの幼なじみの小さな手を守つていよう。ふと脳裏
になにかがよぎつて、カリュは空をみあげた。

星がきれいな夜空。四方がうつすら赤い。
はつとカリュは思い出した。

「ジニィ、『めん。俺、ちょっと行つてくる』

「え？ あ 」

「すぐ戻るから！ 大丈夫って、母さんにいつてて！」

「カリュ！」

幼なじみに手を振りながら、村はずれに走った。

小屋は炎に包まれていた。

巨大な焚き火となつて、轟々と火の粉をまきちらしながら燃えて
いる。その手前に、立ち尽くしている人物がいた。

「ナオミー！」

声をかけながら、カリュは自分の勘違いに気づく。

小屋の手前、炎に照らされた濃い影のようなその相手は、立つて
はいたが尽くしてはいなかつた。

笑い声がひびいていた。

はじめて聞く、とても楽しそうな笑い声。

それを耳にしたカリュはなぜか嫌な予感をおぼえた。

「……ナオミ？」

女が振り返つた。

輝くような笑顔だつた。逆光のはずなのに、カリュにはそれがは
つきりと見えた。

「ああ、カリュか。どうした？ こんな時間に」

はきはきとした口調にとても違和感がある。

「火事、いや、そうじゃなくて、小屋が！」

「ああ これが。いや、いいんだ」

爽やかな表情で彼女は言った。

「もういらないからな」

「いらっしゃって」

絶句して、すぐにカリュはそれビルではなことと思つ出した。

「ナオミ、あいつは？」

「あいつ？」

「今日のお風、連れてきたドーラゴンだよー。まだ中にいるの？？」

不思議そつな小首をかしげるのに、苛々としながら呟ねる。

ああ、とうなずいてナオミは答えた。

「あいつならいいにしている」

「そうなんだ」

ほつとして、すぐにカリュは顔をしかめた。

ナオミのやせのじじこも、かじも、ドーラゴンの姿も見えなかつた。

「……ビルへ？」

「だから、じじだ」

ナオミは自分の胸に手をあてて呟つた。

服のなかに隠してゐんだらうか。おもわすまじまじとふくらみを見てしまつて、そんな馬鹿なとカリュは頭をふつた。

「……えつと、どういう意味？」

「察しが悪いやつだな」

朗らかに微笑んで、ナオミは箸を口にした。

「あいつは、私が食べたよ」

「え？」

間の抜けた声をかえすカリュに、ナオミは手を差し出した。上向きのひらに、灯りがうまれる。赤い火だった。

「ふふ。力ある言葉もいらない。すごいな」

楽しげに言う彼女の口元、灯りに照らされたそこが青色にぬれでいて、カリュは気が遠くなるのを感じた。腰が砕けてへたりこむ。

「どうした、大丈夫か」
ナオミが近づいてきてカリュを立たせてくれた。温かくて、力強い手。

その温かさは、彼女のものではないような気がカリュにほした。
「本当、こ。食べちゃった……の？」
ナオミは満面の笑みでうなずいた。

「ああ。食べた」

聞き間違いではありえない。ふたたび、カリュは地面にくたりこんだ。

「どうした。怪我でもしてるのか」

「怪我つて」

怪我してたのは、あいつだ。あのドラゴンだ。
だから連れてきた。かくまつてもらおうと思って。村じや怒られるから、ナオミの家なら安全だと思つて
「ステータスに異常はないようだが。どうした、カリュ」
「どうしたじやないよ！」
カリュは声をはりあげた。

「なんで、そんな。食べたって、どうこりひどや、ナオミー。」

きょとんとして、ナオミは綺麗なまつげをまばたかせた。

「なにを怒ってるんだ？」

不思議そうに続ける。

「ドリゴンだぞ。あれがどういつ存在か、お前たちだって知つてる
だろつ？」

「そり、だけど。だけど、食べたって……」

「お前たちも牛や豚を食べる」

「そりゃないよー。だつて、友達なのにー。」

「友達？ ドラゴンが？ おかしなことを言つやつだな」

「おかしなことを言つやつだな」

くつくつとナオミは笑った。

とても綺麗な笑みだった。やっぱり、ナオミは美人だった。だからこそ、カリュはそれがとても恐ろしく思えた。

「ああ ドラゴンだけでなく、私もそうだと思つてくれていたのか。カリュ、お前は優しいな。そして変わつてゐる。はじめて会うよ、お前のようなのには」

そつと頭をなでられて、カリュは後ろにさがつてそれから逃げた。ナオミは笑い続けている。

「でも、それは勘違いだ。ドラゴンは友達にはなれない。私だってそうだ」

カリュは顔をしかめた。

「なんで、そんなこと言つんだよ」

「違うからだ」

ナオミは言つた。

「『ドラゴン』とお前は違う。私とお前も、違う。それなのに、友達になれるはずがないだろ？ 互いのことがわからないのだから」

「そんなの！」

「わからないじゃないか か？ いいや、わかる。試してみようか。指定。ララパタ村はずれの小屋。対象²」

ナオミがなにかを口にした次の瞬間、カリュは大きな力で吹き飛ばされていた。

悲鳴をおしゃらして、受身を取るつとする。予想した痛みがいつまでたつてもこなかつた。目を開ける。

ナオミの姿が遠くなつっていた。正しくは、カリュのほうが遠くなつっていた。

一瞬で、十メートル近く飛ばされている。痛みも、衝撃もなにもなかつた。魔法？ ぞつとしながらカリュは立ち上がつた。

「魔法ではないよ。設定だ。これでもうお前はそこから近づけない。できるならやつてみせてくれ。もしできたら、抱きしめてあげる」なにをいつているのか理解できなかつた。

カリュは足を持ち上げて一步を踏み出そうとして、宙でかりりふりて態勢をくずした。

あわててバランスをとるが間に合わない。その場で転んだ。前のめりでなく、後ろに尻餅をついて。

「……え」

転んだまま、足をのばす。

そこにはなにもない。壁も、力もかかつてないのに、足がそれ以上すすまなかつた。

まるで見えない壁があるように。といつよりは、身体が先にいくのを拒んでいるような感じだつた。もう一人の自分が、勝手に身体に命令をだしているような。

魔法でない。理屈ではなく、カリュはそのことを理解した。これはそんなものではない。

「それがお前という存在の限界だ。カリュ・ファイート。職業・村の子ども。LV3。装備・布の服。手製の投石紐。備考・わんぱくだが正義感の強い、素直な少年。父親のように立派な獵師になることを夢見ている。隣の家のジーニアスとは生まれながらの幼なじみで、なにかにつけて年上ぶる彼女を少々うつとうしく思つてゐるが、大切にも感じてゐる。……ふふ、可愛いな。しかし、今じゃこんなのがまで見れるのか」

「な、」

「なにを。お前のステータスだよ。カリュ」

炎を背にしてゆっくりとカリュに近づきながら、ナオミは言つた。「元々、お前たちのステータスは表示されていたが。しかし、隠されていたソースまで見れるというのは、凄いな。ちょっと量が膨大すぎるが。……ああ、お前は本当に私を大切に思つてくれていたの

だな。嬉しいよ、カリュ」

頭をなでた。

カリュは動けなかつた。

前に進めないのはなにかの力がかかっているからだつた。
なら、後ろにもいけないのは？

それは間違いなく、目の前の相手が怖かつたからだ。

いまさらのようにカリュは氣づいていた。ナオミはさつきから、
ぼくが心で思つただけのことを口にしてる……！

「そう。私にはお前の全てが見える。震えているのも。その理由も。
それが私とお前の違いだ、カリュ」

手を離して立ち上がり、彼女は言った。

「自己の存在に悩まず、ただ与えられた役割を果たす。我々の行動
に異を唱えられず、許可された場所にしか足を踏み入れることもで
きない。そういうものなんだ。だからお前はそこから進めない。今
さつき、私が小屋周辺への接近を禁じたからな」

その言葉は、ひどく冷たい声に聞こえた。意味はわからずとも、
あまりに容赦のないものであるように思えた。

哀れみの表情で見下ろしている。

それが無性にくやしくて、カリュは全身に叱咤して立ちあがつた。
ナオミに掴みかかるうとする。しかし、彼の足は根がはえたよう
にぴくりともその場から動かなかつた。

「……怒つているな。だが、それもすぐに消える。お前達は逆らえ
ない。怒りを持続できない。そうして生を繰り返す、かわいそうな
あやつり人形なのだから」

ナオミの伸ばした手がカリュの頬をなでた。愛しさのある仕草だ
つた。

向こうから近づいてきたのなら、動ける。

カリュはナオミの手に噛みついた。広がった奇妙な味わいに口を離して、そして声をうしなった。

噛みついた手のひら、その傷から青い血が流れていた。

あの小さなドリーピングが流していた血の色だった。人の血ではなく。

痛みなどまったくないといつ平然な顔のまま、ナオミが優しげに言った。

「お前は優しかった。すごく優しかった。だから、お前の記憶には触れないでいくよ」

腕が伸びる。

やめろ、と抗うことはできなかつた。金縛りにあつたように身体がうごかない。

そつと額に触れるあたたかな手のひらにすべられて、カリュの意識は闇におちた。

絶望にも似た別れの台詞が聞こえる。

「……さよなら、優しいドリュ」

カリュは自分の部屋で目を覚ました。

夢だったのか。寝ぼけた視界で天井を見ながらそつ考える。左手を見る。

そこには包帯が巻かれている。にぎると、ずきんと痛んだ。

夢じゃない。

「ゴブリン。変なしゃべりかたの魔法使い。小さなドラゴン。火事。ナオミ。そして

……自分はどうやって家に戻ってきたのだろう。火事は？ 村は、いつたいどうなったのだろう。

いろんなことを頭に思いうかべながら、カリュは部屋をでた。でたらすぐそこも部屋になっていて、三人の姿がある。父親と母親、もう一人。母親はキッチンで朝ごはんの準備をしていて、あと二人は暖炉前のテーブルに腰かけていた。

「おはよう」

いつものように無言の父親と、背中をむいた母親に挨拶をして、顔をあらつてこようと外の井戸に向かいかけて、扉に手をかけところでカリュは違和感のしつぽをふんづけた。

振り返る。

「ずいぶん遅いお目覚めじゃな」

銀色の髪と褐色の肌をした見知らぬ誰かがそこにいた。

いや、知らない相手ではなかつた。昨日、カリュを助けてくれたあの魔法使いにちがいなかつた。

「な、なつ」

「なんでここにおるかと言われても。招かれたから泊まつただけ

よ

招かれた?

父親が立ちあがり、カリュのちかくにやつてきた。げんこつをようとす。

「痛つ！」

目の前に星がとんだ。

しゃがみこんで頭をおさえるカリュに、静かに怒った声がふつてきた。

「……昨日、村はずれで寝ていたお前を連れて帰つてくださいたんだ。ちゃんとお礼をいいなさい」

「そう、なの？」

もう一発、げんこつがおちた。

「そりなんゴザイマスカ」

涙目になりながら見あげたカリュに、銀髪の魔法使いは涼しげな表情でこたえた。

「でかい火のそばで気持ち良さそうにしていたのを、たまたま見つけただけじゃがな」

「火……」

「そうだ。森の火事も、この人が魔法ですべてしずめてくださった。村を救つてくれたんだ」

魔法。火をつけることができるなら、反対のひとだつて消すことだつてできる。

ゴブリンをあんなに簡単に倒した魔法使いなら、たしかにそのくらいの魔法はつかえても不思議はなかつた。

尊敬の表情であおぎみるカリュに、相手は照れもない態度で、「探しものをしていたついでよ。褒められるようなことはしつらん」「それでも、私たちの村は救われましたから。カリュのことも。本当に、ありがとうございました」

お盆を持ってテーブルにやつてきた母親が、深々と頭をさげた。父親がカリュをにらむように見る。母親を手つだつてご飯を並べていたカリュは、あわてて頭をさげた。

「ありがとうございました」

すぐに頭をあげた。せきこむようにたずねる。

「あの！俺がいた近くに、他に誰か

すつと魔法使いの切れ長の瞳がほそまつた。

「他には誰もおらんかつたが」

「……そう、ですか」

カリュの脳裏に声がよみがえった。 セヨなら。

いつもより豪勢な朝食がはじまつた。

食事のまえのお祈りのあいだ、カリュはじつとテーブルを見るようにしていた。

それを向かいにすわつた魔法使いが、醒めた眼差しで眺めている。

「ごちそうさま」

ほとんど食べ物にてもつけず、カリュは立ちあがつた。

「ちょっとといつてくる」

「カリュ、待ちなさい。こちらの方が、お前に聞きたいことがあるつて」

母親の声がかかるまえに、カリュは扉から飛び出していった。

はあ、とため息をついた母親が、すまなそうに客人をみていった。

「すみません。落ち着きがない子で」

「なに、子どもはあれくらい元気なほうがよかる」

スープを美味しそうに飲みながら、魔法使いは笑つた。

「昨日も、女の子をまもろうと身体をはつておつたよ。よこのおのこじやな」

「そうですか」

嬉しそうに母親の口元がほころんだ。無言で食事を続いている父

親はなにも言わないが、内心でよろこんでいるようだつた。

父は寡黙だが誇りだかく、母は穏やかでやさしい。それこそがはぐくん性格であることは違ひなかつた。それが例え、そつあるべきで定められたものであるとしても。

質素だが心のこもつた食事をあじわい、魔法使いは席から立つた。
「馳走じゃつた。さて、少しづつぱを借りてもよいか」

「それはかまいませんけれど、あの子がどこにいったのか……」

「こちらで探すのでかまわん。見当はついておる」

横がけたフードをとりながら、こともなげにいった。

家を飛びだしたカリュは村のはずれにやつてきていた。

昨日までほつたて小屋がたつていたその場所。今は火事のあとが痛々しく、すべてが焼け落ちてしまつてゐる。

そこに一歩を踏み出そうとして、やはりある場所からはまるで身体が前に進まなかつた。

「くそ」

どこか抜け道はないかと小屋のまわりを一周する。
そんなものはなかつた。はかつたように、円状に見えない壁がたちふさがつてゐるようだつた。

「くそ！」

ふりおろす。痛みも、なにかに触れた感覚もなく、じぶしは宙で止まつた。

カリュは思いつく。穴をほつたりどうだらう。

モグラみたいにもぐつていけば 地面を掘り起こうと手を伸ばしかけるカリュに、冷ややかな制止の声がとどいた。

「やめておけ。爪がはげる」

振り返ったそこに、フードをかぶった魔法使いが立っていた。

カリュは黙つて、道具になりそうなものがないか探した。スコップをとりに帰るより、石かなにかでもいいから近くに落ちてないかと見回して、魔法使いに笑われる。

「やめておけと言つたりうが。いくら掘つても無駄じや。禁止マークは田に見えるところだけではない。上からだらうが、下からだらうが、ぬしはそこから先には進めん設定よ」

カリュは動きをとめて、たたずむ魔法使いを見た。

たつたいま投げかけられた、意味のわからない言葉を思いかえし、わけがわからないことをあらためて確認して、わからないま納得した。

低い声でたずねる。

「……あなたも、ナオミと一緒になんだ」

魔法使いは首をかしげた。

「どうかの。それはちと難しい質問かもしらん」

「せつていつて。なんですか」

とぼけるような相手の態度を無視して、カリュは質問をつづけた。

「えぬぴーしつて、きんしつて。なんで。なんでナオミがあんな

」

青い血。

ぶるりと身体をふるわせたカリュに、魔法使いがいう。

「見たとおりよ。噛みついたときにお前が感じた、それが答えじゃな」

な

この人も、ぼくの心をよんでも。ナオミのよひ。

「そう警戒するな。少しばかりおぬしに聞きたいことがあるだけよ。かわりに、ぬしの聞きたいことにも答えてやる」

「……どうして？ 心が読めるなら、わざわざそんなこと聞くかなく

たつて」

「文字だろうが数字だろうが、羅列は羅列。そこに意味をつけるのは人。わしが読めば、それはわしの答えでしかない。最適解が正解ともがきらん。まして人の心、たゞねて聞くのがもつとも誤差がない。当然、主客をあらかじめ限つたうえでの話じゃがな」

変なしゃべり方のせいもあって、魔法使いの台詞の意味はほとんどカリュにはわからなかつた。

ただ、この相手が自分と会話をしたいのだなどといった理解できた。

「聴いわっぱじゃな。ほれ、じつちこい。膝枕してやる。好きなのじやろ」

「なつ」

突然そんなことを言われたカリュは声をうしなう。母親に膝枕してもらうことが大好きなのは、誰にもいってない。ジニーにだつて内緒だつた。

顔を真っ赤にするカリュをけらけらと笑い、魔法使いは芝生に腰をおろした。

「母御のそれには叶わんじやろつが、わしの膝もなかなかぞ。……

左手の傷を見るだけよ、とつて食いはせんわ」

手招きされるのに導かれてふらふらと、カリュは魔法使いのもとへ寄つていつた。

やわらかそうな太股を見てためらつて、覚悟をきめた。じろんと寝転ぶ。藁のベッドとはやわらかさもあたたかさもなにもかも違う弾力。あきれたような声がふつてきた。

「なんじや。やっぱりしてほしかつたんか

「……ちがつ」

あわてて起き上がりとしたのを、やわらかい弾力でおさえつけられた。

「力をぬけ。ぬしのかわいい幼なじみには黙つておいてやるわ」

「……！……っ！」

ぱたぱたと暴れて、それでも逃げ出せないのがわかつて、カリュは陸にあげられた魚のように脱力した。甘い匂いがした。かぎなれた母親のものとは違う。なんだか眠たくなるような、不思議な香りだった。

持ち上げられた左手の包帯をはずされる。

「こくら低温でも、ああも強く握りしめればこれくらいにはなるか。よつもまあ、あんな無茶をしたものじやの」

「……だって、ほかに武器が」

「褒めておる。まあ、そのあと行動はいかんかったがな」

「……」

魔法使いがわっと手をなでると、そこにあつた傷が消えた。

言葉の通り、魔法のようだつた。呪文もなかつたのに。

痛みもない。さつきまで怪我をしていたといふことをえわからなくなっていた。

ぽかんと自分の手のひらを見上げて、カリュはそれから顔をしかめる。それを魔法使いが上からのぞきここんでいた。

「どうした？ 嬉しくないかよ」

カリュは自分の手をにぎりこんだ。

「……なんか、消えちやうみたいで」

痛みと一緒に、昨日の出来事が。ドラゴンとの出来ごとも、ナオミとのお別れも、ぜんぶ嘘だつたんじゃないかと思えてしまつのが、カリュには怖かった。

「忘れてしまつたほうがよーこともあらひ
魔法使いの言葉はやせしかつた。

「そんなことない」

カリュはこたえる。

「そんなのイヤだ。ぼくは、忘れたくなんかない」

あのカリューンも、ナオミも。

すぐに消える。お前達は逆らえない。怒りを持続できない。そうやって生を繰り返す。

ナオミはそうこつていた。だけど、まくは絶対にわすれない。そう決めた。

じわり、となにかが視界ににじんだ。

「やはりぬしさ、よいおのこじや」

そつと田のうえに手のひらがかぶさる。

「すまん。勝手をした。よけいなことであった」

カリュはだまって頭をふった。

顔におかれた手のひらはあたたかくて、母親のものとも、幼なじみのものともちがつた。ナオミのに似ていた。

ぐつとこじらえようとしたカリュに、やさしい声がつながした。

「泣いてしまえ。まだ泣いておらんのじやね。よこおのこにはな、よつ泣くものよ」

嘘だ。男は、泣いちゃいけないんだ。

そう思つたけれど、声があまりにもやわしそぎた。

名前もしらない魔法使いのひざで、カリュは声をあげて泣いた。

「……聞きたいくことつて、なに」

おもいつきり泣いてから、カリュはいった。

少しほずかしかつた。ぶつきらぼうな口調はその照れ隠しだ。

「うむ」

そんなカリュの気持ちなどしきらぬふつこ、少年の髪の毛をいじりながら魔法使いはいった。

「昨日まで、ここ的小屋に住んでおつた冒険者が、身に竜をやぶし

た。それで間違いないか」

カリュはうなずいた。

「その冒険者は一月ほど前にここに現れたそうじやの。村人と近づくことせず、一人でここに住んでおった」

「……うん。ナオミと話すのは、ほく 僕くらいだった。村の人も、近づいちゃいけないって」

ジニーも、カリュがナオミに会いにいくのをすぐ怒っていた。だからカリュはナオミに会いにいくとき、いつもそりと会こにいつていた。

「ふむ。……ぬしが森で見つけたドラゴンをつれていったときのことだがな。その冒険者は震えておったようじやの」

どうだつただろう。

あのときはドラゴンの怪我のことで頭がいっぱいで、そこまではおぼえていなかつた。

「他ならぬ、ぬしの記憶に聞いたことよ。間違いない。わしが聞きたいのはそこじや」

一拍の間をおいて、魔法使いはいった。

「その女、どうして震えていたと思う?」

「……わかんないよ、そんなの」

「わかる。いや、ぬしにしかわからん。考えてみよ」

強い口調だつた。

カリュは目を閉じて昨日のことを思いかえす。

ドラゴンを見たときのナオミの表情。いつものよつよつとした態度で、ふらふらと近づいてきて ああ、確かに手当てをしているあいだ、隣でじつとドラゴンを見ていた。なにかつぶやいていた。それがなんといつていたかは、わからないけれど、

「……怖がつてた」

「なにを」

「ドリゴン」

いや、セウジヤない。自分のつぶやきをカリュは否定した。

「……たくさん。多分、いっぱいなんだと思つ」

村とかかわるうとしないで一人で村はずれにいたのも、ずっと小屋のなかにこもつてたのも。

ドリゴンが理由なんじやない。あのドリゴンは多分、その一つだ。

魔法使いが深い息をはいた。

「なるほど。だからこそ、自分がそれになることを望みおつたか。無茶なことをしよるわ」

笑つてこるような、怒つているような声だった。

カリュののどをくすぐり、それをいやがつて鼻をよじつた拍子に魔法使いが立ち上がる。

「ぬしの考えで恐らく間違つとらん。わっぽ、感謝するぞ。聞きたいことはそれだけじゃ」

「とにかくこうとする背中に、あわててカリュは声をかけた。

「まつて！ まだ、聞きたいことがあるのー！」

「……ああ、そうだつたの。すまん、ありや嘘よ」
あつせつと魔法使いはいつた。

「嘘、って」

あまりに堂々と言われてしまい、カリュは一の句がつげない。
フードの縁からのがく涼しげな目元を草原の風にゆらして、魔法使いは笑つた。

「といづのは冗談じやが。だが、聞かんほつがいい。聞いたら、きっとぬしは帰つてこれんくなる」
「帰る？」

「向かうために、聞くのであるつ」

ぎょっとしかけて、すぐに氣をとりなおした。

自分の考えを読まれているなら、隠したつてしまふがない。それで怯える理由もない。

「……ナオミを、探したいんだ」

「探してどうする。違う、といわれたのじゃろ？」「だから。なにがちがうのか、教えてもらひて。考えて」

「聞いたところで、事実は変わらん」

魔法使いはいった。

「諦めよ。ぬしはわしらとは違つ。このまま村で大きくなれ。命と、両親と、幼なじみを大事にせい。そのほうが幸せよ」

「イヤだ！」

カリュはいった。

だだつこの態度だつた。それに続いた行動がちがつた。

カリュは地面に目をやつて、手ごろな大きさの石をさがした。それをひろつて、その鋭利なかどで左の手のひらを切り裂いた。魔法使いが小さく目をみひらいた。

激痛がはしつた。涙がにじむ。手のひらから鮮血が流れた。一回、二回、と傷のうえからさらに切り刻んで、カリュは涙目のまま、真っ赤に染まつた手のひらを魔法使いにつきつけた。

「絶対に、わすれない。忘れてなんか やるもんか！」

二人はしばらくにらみあつた。

上から見下ろす静かな眼差しと、下からにらみあげる涙のたまつた視線がからみあい、先に根負けしたのは魔法使いのほうだつた。

「見上げた頑固者じや」

呆れたようにいい、空をみあげる。

思案するよつこしばらくそのままの姿勢で、それからカリュに顔をむけた。

「……帰れんぞ。ぬしは今までのぜんぶを捨てる事になる。村も、やさしい両親も、かわいい幼なじみも。ほんにそれでいいんじゃな」

すきんすきんと、まるで手のひらに心臓があるみたいに痛みが脈を走っている。

その痛みを丸ごとこぎりしめて、カリュは大きくなづいた。

いなくなつたナオミを探すために村をでる。

そう決意して、カリュの頭にうかんだのは両親とジニーだった。いきなり村を出るなんていいて、反対されないはずがない。

母親は心配するにきまつてゐし、父親はなにもいわずにげんこつを落とすだろう。どうやって説得すればいいのか悩みに悩んだカリュだったが、魔法使いはあつさりと告げた。

「問題なかる。わしが一緒だからな」

それは、村の恩人の言葉があれば話くらいきいてくれるかもしれない。

どうしてそこまで自信があるのか不思議に思つたカリュをみて、魔法使いは口のはしをもちあげて、

「そういうものよ」

意味ありげに、それ以上なにもいわなかつた。

相手のいった言葉の意味をすぐにカリュは実感した。

村にかえり、両親に魔法使いについていきたいことを告げると、二人は驚き困惑した様子だったが、反対はしなかつた。父親はしかめつらで、母親は辛そうに、それぞれ深い嘆息をはいただけだった。

「 そうか」

怒鳴りつけられるとばかり思つていたカリュは、肩すかしをくらつた氣分で父親をみあげた。

「 ……いいの？」

恐る恐るたずねると、父親はためいきのよつたな答えをかえした。

「仕方ないだろ?」

その答えに、カリュは奇妙な違和感をおぼえた。

仕方ない。

それは、自分がそう決めたから？ それとも、村の恩人が一緒だから？

カリュは隣にたつ魔法使いをみた。

会話をききながら、それがさも当然だといつ風にその人物は立っている。

いつたい、なにが当然なの？

ぞわりと鳥肌がたつた。

カリュの視線にきづいた魔法使いが少年をみた。心が読めているはずなのに、その目にはなんの感情もつかんでいない。ただ見おろしていた。

なにかおかしい。なにかが変だ。

その違和感の正体がなんなのか、カリュが考えにいたらないうちにも、話はどんどん拍子ですぐんでいた。

出発は明日。準備や、村のみんなへ挨拶をしてまわって、旅立ちの日をむかえる。

自分たちが大人連中に話をしてくれるから、まずは身の回りの準備をしてきなさい。それから、ジニーにはちゃんと話をしておくのよ。両親の言葉をほとんどうわのそらでききながら、カリュはざつと考えていた。

変だ。変だ。ぜつたに変だ。

「だから言つたじやろうが」

両親がいなくなつて二人きりで、魔法使いがいつた。

「わつぱ。ぬしはもう戻れん。なんの疑問も恐れもいだかず、幸せに生きることはできん。これから、ぬしは全て失う。全てを疑う。

全てが崩れる。ぬしがこの村から外にでるとこ、「う」とは、やつこ「ことじゅ」

ふと、カリュの足元に目をやつて眉をもひあげた。

「おー。ぬしは一体、なんの上に立つておるかよ」

え、と視線をおとしかけたカリュは、ぐにやりと足場がくずれるのに悲鳴をあげかけた。

いつのまにか、下が泥みたいになつていてる。木が、土が、ビルビルのぐずぐずになつて身体のバランスがとれない。椅子をつかもうと、のばした手が空をきつた。

転んだ。痛みにめをどじて、ひらいたときにはすべて元にもせびつていた。

床も、椅子もいつもとおつこにあつた。

カリュはすわりこんだまま、魔法使いをみあげる。
相手はさつきから一步も動いていない。魔法なら動く必要はない。呪文だつてつかわずに火傷をおしてみせた。けど、これは、魔法じゃない。

カリュの全身にびつしりと汗がついていた。そのつめたい感触が、カリュに正しい認識をもたらした。

もしかして、おかしくなつたのはぼくなんじゃないか？

「聰いのう」

魔法使いが微笑んだ。

「正常か異常かなぞはこの際どうでもよい。重要なのは、おぬしが変わつたといふことじゅ。怖かろう。ぬしが今まであたりまえと思っていたことが、これからは全て信じられなくなる。恐ろしうつたまらんくなる。今なら、まだ戻れるがの」
そうしろとすすめている口調だつた。

むつとたちあがり、カリュは魔法使いになにもこたえずに自分の部屋へむかった。

「頑固じやな」

楽しそうに、カリュの後ろをついてきた魔法使いがベッドに腰をかける。

今せらおどされても、だまされるもんか。それがおどしなじではないことにカリュはほとんど気づいていたが、あえてそういう思い込むことにして旅の準備をはじめた。

準備といつても用意できるものは多くない。下着と、替える服。あとは投石につかうために、毎日拾いあつめておいたつぶで。それから、ほんの少しだけの硬貨。

村では貨幣を使う機会なんてほとんどなかつたから、これはカリュが戦利品や拾いものを村の道具屋に買い取つてもらつてこつこつあつめたものだつた。

用意したそれを大きな布袋につけこんで、もう少し中身に余裕があつた。他になにか詰めておくものはないかなと首をめぐらせていると、ベッドから声がかかる。

「無理に探さんでよい。忘れるものは忘れる。入らんものは入らん。満杯にするよりは、半分くらいで丁度ぞ。残りには別のものをつめていけ」

しなだれるように横たわつて、魔法使いは妖艶な笑みをうかべていた。それよりもな、と続ける。

「外を見てみい。客じや」

部屋に一つだけついた窓に顔をむけたカリュはげ、と顔をひきがらせた。

そこにはおもこつきり眉をつりあげて、顔を真つ赤にしたジーナ

が窓の向いからカリュをにらんでいた。

カリュはあわてて家の外にでた。ついてきてくれると思った魔法使いは同行してくれなかつた。

「こればっかりはぬしの仕事である！」

意地の悪い笑みをうかべるその姿は、あきらかに楽しんでいる様子にしかみえなかつた。

玄関の扉をあけたそこに、仁王立ちのジニーが腰にてをあてて立つてゐる。ぎょっと身をひきかけて、カリュはとりあえずなにか言おうと口をひらきかけた。

「バカ！」

それよりはやぐじーイの怒声がどんだ。

「バカ！ バカリュ！」

呼吸を忘れてるんじゃないかと思えるくらいの勢いでつづく。

「ごめ

「バカ！ バカ！ おたんこなす！」

ああ、これはだめだ。

弁解をあきらめて、カリュは口をつぐんだ。

こうなれば最後、ジニーの氣がすむまで黙つてゐるしかない。背を伸ばして目をとじて、男らしくすべてを受け入れようと心にあめるが、

「チビー！」

その一言でかつと頭に血がのぼつた。

「チビじゃない！」

「チビじゃない！ あたしより小さいくせに…」

「ほとんど一緒にないか！ 髪の毛のせいだら…」

「そんなわけないでしょ、バカリュ！」

噛みつけるほど近くで言い争つて、ふとジニーの目に涙がにじんだ。

そのままわんわんと泣き出す。

カリュは途方にくれた。

あわてて頭をさげてあやまつて、なだめすかして。ジニーが泣きやむまでにものすごい時間がかかった。

「……ナオミが、いなくなつたんだ」

裏庭の原っぱに場所をつついて、カリュは隣にすわるジニーにいつた。

さつきまで泣きじゃくっていたジニーは、まだ鼻をならしている。目が真つ赤だつた。

お昼ちかくの太陽がぽかぽかとしていて、それがジニーの涙をかわかしてくれないかなあと思いながら、カリュは続けた。
「ぼくのせいなんだ。だから、探しにいかないと」

「あの、女人の人と？」

「……うん」

風がふいて、草がゆれた。

一人のいる奥には村をかこむ柵があつて、その向こうの林がそのまま森につながっている。そのずっと先にある燃え落ちた声を見るようにしているカリュをちらりと横目でうかがつて、ジニーはぎゅっと唇をかんだ。

「……あの人、きらい」

「あの人つて？」

ジニーはこたえなかつた。

「ナオミもきらい。だからあんなに、あそこには行っちゃいけない

つていつておいたのに」

また、じわりと涙がうかんだ。

わたわたとして、カリュはなにもいえない。頭の中で、銀髪の魔法使いにためいきをつかれたような気がした。

ジニーがかかえた膝に顔をうずめた。

なにもいわない。嗚咽がきこえたから、涙をこらえているのかもしけなかつた。

カリュは黙つて、待つた。

「冒険者なんて。大つきらい。たまに村にくるけど、の人たち変だもの。偉そうで、ずうずうしくて、礼儀しらずで」

「……うん」「

「意味わかんない。なんでカリュが、そんなのにならないといけない。ナオミなんて、関係ないのに。勝手にすみついた冒険者が、勝手にいなくなつただけなのに」

「うん」

「うんじやないわよ、ばかあ

ジニーが顔をあげた。

生まれたときからの彼の幼なじみは、やつぱり泣いていた。涙をぼろぼろとながして、目と鼻があかくて、ほつれた髪がほっぺたにはりついていた。ひどい顔だつた。

ジニーの泣き顔がカリュは苦手だつた。そんな顔をさせたくないなかなかつた。

同時に、すこし嬉しい気もしていた。

ジニーはおかしくない。両親のように変な物分りのよさがないことが、逆にカリュをほっとさせていた。

「大丈夫。俺、もどつてくるよ」

魔法使いからいわれた言葉を無視して、カリュはいつた。

「絶対もどつてくるから。約束する！」

右手をさしだす。

いやがるジニーの右手を強引につかまえて、小指どうしをからめて上下にふつた。約束をかわすときに行つ誓ひだつた。
「うつそついたら」「プリンからひやくたつたき。ゆーびきつた。

ほら、ねつ

「……しらない」

ジニーはそつぽをむいた。

すこしだけ機嫌がなおつてゐる。ほつとして、カリュはえいやつとジニーの膝のうえにねころんだ。

「カリュ、ちょっと、なにして

「いいじゃん。ちょっとだけ」

あわてるジニー。気にせず、カリュは田をとじた。

はじめてしてもらう幼なじみの膝枕はきもむりよかつた。

母親とも、あの魔法使いともちがう。

当たり前だ。ジニーは、ジニーなんだから。

「……もどつてくるよ」

ぱたりと、カリュのほつぺたにしづくがあちた。

「 約束だからね」

上からのぞきこんだ彼の幼なじみが、泣いていた。

「ぜつたい、ぜつたいだからね。待つてるんだからね

「うん。ぜつたい」

田を開いたカリュがいつと、それでようやくジニーはむづとだけ笑つた。

「……カリュ。膝枕が好きなの？」

答えに迷つたけれど、カリュは正直にこいつとこきめた。

「うん。好き」

「……やつぱり子どもじゃない」

「そんなことないやー」

カリュは頭を横にして、幼なじみのおなかに顔をおしあてた。

「ちゅうと。じゅー」

狼狽するジーヤにかまわず、臭いをかぐ。お口をまと十の香りがした。

忘れまこと思つた。

この香りを、絶対にわすれない。そうすればまたこの村に戻つてこれるはずだからとカリュはそう信じた。

「もう。ほんとに、子供もなんだから」

呆れたように笑つて、ふと気になつたようじジーヤがたずねた。

「お母さんにも、してもらつたりするの?」

「……たまに。ちょっとだけ」

「ね。お母さんのと、あたしの。ビツチが気持ちいい?」

どうだろ?。

かたさ、やわらかさ。弾力。あつたかさ。色々な観点から考えて、

「よくわかんない」

「なによそれ」

不満そうにジーヤが口をとがらせた。

「だつて。うーん、ジーヤのはどつちかつていりと、お姉さん寄つ

かなあ」

びくつと、ジーヤの身体が震えた。

「お姉さん?」

自分の失言にきづかず、カリュは目を閉じたままつづける。

「うん。母さんのとはちょっと違う感じ。なんだろ、弾力かなあ。

別にどつちが

なぐられた。」

不意をつかれて、そのうえおもこひきり全力でなぐられて、カリュは意識をうしないかける。

「な、なにすんだよ…」

飛び上がって、そこで動きをとめた。

カリュの田の前に、剣呑な雰囲気の幼なじみが「ぶしがためていた。

「……お姉さんが、どうしたって？」

なぜかはわからなくとも、なにか自分がドラゴンを怒らせるようになことをしてしまったことには気づいて、あわててカリュはいった。

「いや、えつと、ジーヤもはやくお姉さんみたいに　じゃなくて、お姉さんになつてきたなあつて」

「誰」「え」

「ナオミにしてもらつてたの。今まで一人で村はずれにいって、そんなことしてもらつてたんだ」

なにかとんでもない誤解が生まれようとしている。

カリュはふるふると首をふった。

「違うよ！　相手はあの魔法使いのお姉さんで、してもらつたのはさつき一回だけで」

それ以上は続かなかつた。

「ゴブリンだつて一撃でたおせそつな拳をうけて、カリュはその場で意識をうしなつた。

「バカリュ！　だれが、あんたなんか待つてるもんですか！」
ずかずかと足音をふみならしながら、幼なじみは去つていつた。

「たわけじゃなあ」

ベッドのうえで田をとじて一部始終を見ていた魔法使いは、おか

しそうに腹をかかえていた。

広っぽで氣絶していたところを起されたカリュは、村長や村の人たちに挨拶をしてまわった。

あわただしく一日が終わって、翌日。

「それじゃ、いってきます」

家の扉の前で、カリュはうしろを振り返った。父親と母親がそれぞれの表情でたつていて。

無言で父親がうなずき、母親が口をひらいた。

「……怪我に気をつけるのよ」

「うん」

母親は顔をくしゃりとゆがめると、カリュの隣にたつ魔法使いを見た。

「少ないですけれど、どうかこれを」

布袋からじゅらりと硬貨の音がなる。魔法使いは首をふった。

「可愛いせがれを預かるだけでも大惡というに、そんなものまで受け取れるか」

そういうて、逆に母親の手に何かをのせた。

「それを手にして強く念じるがよい。わっぱが健やかな、石がほのかに輝く。姿が見えるわけでも、声が聞こえるわけでもないが。それでも、心を休ませる足しにはなるじゃら」

掘り出した水晶のような石を受け取って、母親は泣き笑いの表情で頭をさげた。

「ありがとうございます」

魔法使いが父親をみた。父親は黙つたまま頭をさげただけだった。小さくうなずいた魔法使いがカリュをみおろした。

「いくかの」
カリュはこくつとうなづく。

魔法使いにつづいて歩きながら、カリュは何度も家の前にたつ両親を振り返った。

生まれ育つた家と両親が小さくなる。

ふいに不安になつて、カリュの足が止まりそうになる。

みあげると、魔法使いは振り返ることなく歩みをつづけていた。置いていかれないよう、カリュは小走りになつて彼女の後をおいかけた。

住みなれた村を歩いているうちに、感傷がわいてくる。
なにを弱気になつてるんだ、また戻つてくるんだ。そう約束したじやないか。

自分を叱咤して、ふときづいた。

村の出口に誰かがいた。柵に背をあずけるようにして下をうつむいているのは、カリュと同じ年頃の少女だった。

「ジーヤ」

呼びかけると、ジーヤは怒つたような表情で顔をあげた。

目元が腫れている。一晩中泣き明かしたとわかるあとだった。

「あたしもいく」

ジニイはいった。彼女の足元には大きな背負い袋があつた。
「なにいつてんだよ。そんなのダメにきまつてるだろ」

カリュはいった。

「なんでカリュはいいのに、あたしはダメなのよ」

「それは、だつて」

カリュは魔法使いをみた。フードをかぶった魔法使いは、そ知らぬ顔で遠くをながめている。

「……危ないし」

「そんなの、カリュだつておなじでしょ」

「俺はいいの。でもジニーはダメだ」

「なにそれ。意味わからんこよ」

ジニーは魔法使いの前にすすみでて、下からのぞきこむようにしていった。

「お母さんからね、ちゃんと許可をもらつてます。一緒に連れていつてください。おねがいします」

ペニワと頭をさげる。魔法使いがちらりとジニーの荷物に目をやつた。

「隣町までの使いか」

ジニーは田をまるくしておどりいた。

「……うちのお店の仕入れの連絡を、手紙で。ほんとは村に郵便屋さんがあるんですけど、今月はおそいか。それで」

「ふむ。……帰りは送つてやれんが、父親が向ひに立つてゐるのなら問題ないか。まあいいじやろ」

え、とカリュは魔法使いの言葉をうたがつた。

「しかし、黙つて連れていくては入さらいと思われかねん。村長さんに話をしてくれるから、ぬしらむちと待つておれ」

「ちょっとまつてよ！ そんな、勝手に」

「ありがとう」

カリュの文句はジニーの声にかきけられた。ちらりと振り返った魔法使いが意地悪くいう。

「嫌なら、ぬしが説得せい。わしが戻つてくるまでこな」

そのまま歩いていく。

言われるまでもないことだ。カリュは幼なじみをこらみつけた。

「ジニー！ なにかんがえてんだよつすました顔でジニーがこたえる。

「だから、お使いよ」

「そんなの大人にまかせておけばいいだる。ジニーがいく必要なんてないじゃないか！」

「あら、あたしはカリュとちがつて、村をでるのははじめてじゃないわ。隣町にいつたことだつてあるもん」

「そのときはおじさんと一緒にたんじやないかつ」

「だから、あの魔法使いさんについてくの。町にはお父さんがいるから、帰るのも一人じゃないし。なにも問題ないわ」

なにが問題ないだ。おおありだ わめきたくなるのをぐつとおさえて、カリュは声をおちつかせる。

「……わかった。じゃあ、その手紙あずかるから。俺からおじさんに渡せばいいでしょ」

「ダメよ」

「なんですか！」

「だって、カリュ、うちの商品のことなにもわからないじゃない。一緒に店番しても抜け出してすぐどこか遊びにいっちゃうし」

ジニーの家は村で道具屋をひらいている。一緒に店番をしようとしたジニーから誘われるたびに、途中でつまらなくなつてカリュがねだしていたのは事実だった。

そのことと、店にならぶ品目について無知であることは、手紙を渡せばいいだけの今回の一件とはまるで関係ない。それにカリュが気づけなかつたのは、ぬけだして遊びにいっていた先が村はずれのナオミの家だつたからだ。

ジニーはナオミのことになるとすぐ怒りだす。カリュがその話題に慎重になるのをみこしたうえでジニーはそうつてこるのだった。

案の定、言葉をつまらせるカリュは、ジニーは駄目押しが近寄つてその目をのぞきこんだ。

「ね、いいでしょ。町までだから。 お願ひ、カリュ」

そんなふうに下手にでていわれると、カリュは弱い。眉間をしかめてうんうん唸つて、観念したようにいった。

「……町までつて約束する？」

「するする」

輝くような笑みでジニーはうなずいた。

「絶対だぞ」

「うん、ぜつたい」

「……指きり。『アーリン百』　一一百たたきだからな」

「ん」

気軽な仕草でジニーは右手をさしだした。歌の調子にあわせながらからめた小指を上下にふつて、約束をかわす。

にこにこと満面の笑みをうかべるジニーに、カリュは大きくため息をつく。

自分が負けたのだとほつきりとわかったからだった。

魔法使いはすぐに帰ってきた。

カリュとジニーの顔をみて、どうこう話になつたのかそれだけで察したらしかつた。なにも聞かずに自分の荷をもつて、二人にいつた。

「さて、いくか」

しぶしぶとカリュが、嬉しそうにジニーがうなづく。

町の出入口の門をぬけたところで、ふと氣づいたよつて魔法使いが足をとめた。

「そういえば、まだ名前もいっとらんかったな」

自分をみあげる幼い二対の眼差しに、にこりと笑む。

「わしの名は　ディーネじや。よろしくの」

フードの奥からでも人を魅了してやまない表情だった。

おもわずみとれてしまつカリュをみて、ジニーがむつとして肘鉄をくらわす。

「ぐえ。……カリュ。フイート、です」

「ジーニアス・ラブランテです。よろしくお願ひします」

「つむ。ではこいつ。町までまへ口ほどか。野営の場所まで、明る
くつかひつておきたこのい」

「はい」

声をはもられて答えて、一步。

おぼえのある奇妙な感覚にカリュは全身をふるわせた。

昨日、家で感じたのとおなじ、そこがぬけるような氣色のわるい
感覚。足元からつたわって頭と手のひらのわきまでふるわせるその
震えをのみこもうと、じくじくと睡をのんだ。

「？ どうかしたの、カリュ」

少し先をいくジーネがふりかえつてたずねる。

彼女の顔色は普通だった。

「ジーネは感じないんだ。この気持ちわるいのは、ぼくだけ？」

「……つむ。なんでもない」

ジーネに向ひうで、銀髪の魔法使にはやはり立ち止まりず、後ろ
をふりかえることもしない。

負けるもんかと歯を食いしばり、カリュはさうこ一歩をふみだ
した。

カリュにはティーネに聞きたいことがたくさんあった。

ナオミのこと、ドラゴンのこと。「せつてい やら、「えぬびー
しー」とこう言葉について。けれど、やっぱにジーネがいるせいであ
くそのことを質問できなかつた。

気にしないでたずねればいいのかもしれない。しかし、それは駄目だと誰かがカリュの頭のなかでささやいていた。ジニーには、このことをきかせちゃいけない。

だから、ジニーにはついて来てほしくなかつた。
説得できなかつた、というより向こうに説得させられてしまつたのはカリュだつたから、今さら文句もいえない。ただ、やっぱりそのことをおもいだすと、カリュはすこしづつ不機嫌になつてしまつ。そんなふうに不満に思いながら歩くカリュの前で、ジニーとディーネは一人でおしゃべりしながら歩いていく。

とても仲がよさそうだった。

それがまた、カリュにはおもしろくない。いつたい自分がどちらの笑顔をみてそう思つているのかは、よくわからない。ただなんとなく、つまらなかつた。

ちらりとディーネがカリュを見た。からかうような視線。

読まれた。

かつと氣恥ずかしさが頭にのぼり、カリュはあわてて視線をはずした。

心を読むなんて反則だ。卑怯だ。そんなことを思いながら、それさえも読まれてしまつているのだと思つてなにも考へないようになる。

森の風景が視界にはいった。

たくさん的人が通るたびに自然とつくられていつた街道。ララパタの村と隣町を結ぶ重要な道だが、決して整備されているとはいがたい。もともとの人通りが多くないから仕方がなかつた。

町側になれば、ほんの少しだけ舗装されているが、町を出でごくわずかなあいだけ。それでも一応、馬車がとおれるくらいの間隔は確保されている。それも嵐などがくれば、横にたおれた木なんか

でふさがれてしまつ」ともよくあつた。

このあたりの土地は草原か、森か。穀物や家畜を育てるのに草原は必要で、木の実や野生の動物を捕まえるのに森は有益だった。森のそばに村をかまえるのは当然だが、森にはモンスターがやってくるから、当然、危険もある。

街道を歩いていて、のらモンスターとであつことは決してすぐなくない。一昨日のカリュどジーラのように、木の実拾いにて遭遇することも。

それでも街道をつかうのは、森を迂回すれば町まで四日以上かかるてしまうからだ。森のなかをいくというのは問題外。

だから、街道をいくときはモンスターにでくわしてもいいよ、
護衛をやどつたり、集団をつくり向かうのが普通だつた。

そんな時、護衛に雇われるのは冒険者とよばれる人たちだ。彼らはこの世界にたくさんいて、そういう依頼を受け持つことを仕事にしている。

ナオミもその一人だつた。ディーネも。

文字通り冒険をして生きる彼らは、とても強い。魔法を使える人達も多いし、剣や斧、そういう武器の扱いにもたけている。依頼によつては、たくさんのモンスターや凶暴な相手と戦うこともあるからだつた。

けれどララパタ村はとても田舎だから、彼らがくることはほとんどなかつた。

それに、冒険者はいい人ばかりでもない。

昨日、ジニーがカリュにいつたように、彼らのなかには振る舞いに問題がある者も多かつた。たいした依頼でもないのに大金をまきあげたり、途中で依頼をうちきつたり、約束をやぶつたりしたりもする。

それでいてまるでしまなそうにしなかつたりするから、村でも冒険者を嫌う大人は決してすくなくなかつた。

村のはずれに住みついたナオミがさけられていたのは、そうした冒険者に対する偏見があつたのも要因だ。それだけでもなかつたが。

……ナオミは今じる、なにをしているだらう。どににいるのだろうか。

そういうえば、ティーネはナオミを探すようなことをいつていたけれど、なにかあてがあるのか。だいたい、まず隣町について、それからどうにいくんだろ？

自分がまったくにも、これからのことと相手にきけていないことをじまさりのように思ひ出して、でも近くにジニーがいてはナオミやドリゴンのことと伏せるしかない。

それらを伏せて起きだすなんて、どうやつたりてそんなことはできそうにないので、カリュはいらいらと前から流れてくる楽しそうなおしゃべりを聞きながら歩くしかなかつた。

一人のつしろを歩きながら、カリュの不機嫌はましていく。

「ここのあたりでよかるづく」ディーネがそう一人に声をかけたのは、まだ森に十分な明るさがある時間だった。

「今夜の宿はここじゃな」

街道の横にある大きな木には根元にぽつかりと穴があき、雨よけをするのによい場所だった。ここを訪れた人がここで暖をとった証拠が焚き火のあとに残っている。

「もう少し先まで歩けるよ」

カリュの言葉に、褐色の魔術師は首を振った。

「森は暗くなりはじめてからが早い。ぬしも知つておるづく」

「ただけど。でも」

はやくナオミを追いかけないと 言いかけたところに、ペ shin
とジニイに頭をたたかれる。

「バカリュ、わがまま言わないの」
むすつとしてカリュは押し黙った。

「はやる気持ちはわかるが、焦りは禁物よ。旅は長い。走つていてはすぐにバテてしまうぞ？」

覗きこんだ眼差しがカリュを見た。カリュは顔をふせた。
魔術師がくすりと笑う。その声が耳にとどいて、頭がかつとなつた。また笑われた。

「さて、では仕事を分担するかの。向こうの小川から水を汲んでくる者と、近くで薪をあつめる者。小川近くには魔物がいるかもしれないから、ぬしら二人で薪を」

「ぼく一人でいい」

うつむいたまま、カリュはいった。

「 じら、カリコ。あんたさつきから」

頭を小突こうとする幼なじみの手をふりはらう。

「ジニーが一緒にほうがよっぽど危ないじゃないか。また腰をぬかされたりしたら迷惑なんだよ」

「なんですってえ」

怒り顔のジニーがつかみかかってくるのをひらりとかわして、駆けだした。

「あ、こらー カリコつ、もうー」

少年を追いかけようとしたジニーの肩をつかんで、ディーネがひきとめる。

「好きにさせよ」

「でも、カリコ一人じゃあ 」

やんわりと首を振った。

「あのわっぱは無鉄砲じゃが、考えなしではない。心配なかい」

「でも」

「わしと一緒にいたほうがぬしは安全、そう思つてのことじや。そ

の気概を受け取つてやれ」

ジニーが顔をしかめた。

「……勝手なんだから」

「男などそういうもんじや。諦めよ」

ジニーはまばたきする。男、という言葉がうまく幼なじみにむすびつかなかつた。彼女にとつてカリコは弟のような存在だった。

「まあ、それだけでもなかろうがな。おのこなら、一人になりたいときもあるう。そんなときに甘やかすとな、ろくな男に育たんぬしも相手を手元に縛るだけでなく、放流させるくらいの気構えを覚えたほうが後々やりやすいぞ？ まあ、しつかりと手綱は握つとかんとだが」

きょとんとして見上げる少女に妖艶な笑みを残し、ディーネは小

川へと向かっていった。

よくわからない。頭をひねって考えながら、ジニーはその後をつた。

カリュは一人からはなれて、ひとりで薪をひろいあつめはじめた。子どものころからやらされていた薪集めだから手馴れている。生木をのぞき、燃やしあじめにつかう軽めの枯れ木と、火が安定してからつかつ密度のある木を、それぞれ手ごろな大きさでみつくるつた。

ふと後ろをふりかえる。誰もいない。

「ちえ」

カリュは口をとがらせた。ジニーの馬鹿、ほんとに来ないんだもんな。

相手が追いかけてくることを待っていた自分がすこく子どもっぽく思えてきて、カリュは頭をふつてそれを追い出した。

もくもくと薪をひるつ。

頭ではナオミのことを考えていた。

ナオミ。それからドーラ・ロン。青い血。ナオミの笑い声。いつた言葉。N.P.C.。セッティ。

「 いつたいなんなんだよ」

頭のなかに次から次へとうかんできて、もやもやしてとれない。特にナオミから聞かされた言葉がしつこく頭にこびりついていた。哀れむように、ナオミはいった。

そうやって生を繰り返す、憐れなあやつり人形なのだから

その言葉は、なんだかとても不吉だった。どこまでも上から見下

ろされた台詞。いいかえしたいのに、いいかえせない。そんなことをしてしまつたら、もつと恐ろしいことになつてしまいそうな。そんな予感があつた。

「なんなんだよ、も'づ」

いきなり小屋に近づけなくなつたり、地面がどろどろになつたり。村をでるときにすごく嫌な気分になつたのも、多分そのことに関係があるんだ。そうカリュは確信していた。

ナオミはそのことについて知つている。そして、あの魔法使いも。それを早く聞きたかったのに、ジニーが側にいるからそうすることもできない。ジニーをまきこんじゃいけないと、カリュはやはり確信していた。

理由はない。よくわからない。ただの勘みたいなものだが、絶対にそつだとカリュの全身がそう告げていた。

「それだつていうのに。バカジニー」

「なによ、バカリュ」

ぎょっと後ろをふりむくと、腰にてをあてた幼なじみが立つている。

カリュはびっくりした表情をそむけて、薪ひろいをつづけた。

「無視しないでよ」

もぐもぐ。

「無視しないでつたら」

もぐもぐ。

「無視しないでつていいでふあいあ

「ギャー！」

火の玉を背中につけ、カリュはどうあがつて悲鳴をあげた。

「ば、ば、馬鹿じゃないの？ 人にむかって魔法うつなんて無視するのがいけないんでふあいあ」

「わー！」

背中をそりしてひょろひょろした火の玉をよける。

「わかった！ わかったからやめよう、火傷しけやつだらー。」

「ふんだ。あたしの魔法なんか、どうせ服がこげつにゅうひがこだもん」

言いながら、そこでジニーが半眼になった。

「ただし。にきりしめたりしなければ、ね」

ずいと近づいた幼なじみがカリュの手をとった。

「な、なにさ」

「……傷。ないね」

「なんの傷だよ」

「どうして嘘つくるのよ。……あたしの魔法、こぎつたまま、アーヴィングにぶつけてたつて。わつき、ディーネさんから聞いた」

げ、とカリュは顔をしかめた。

「ほんと、馬鹿なんだから。ディーネさんもいつてたよ、あやつはあほうだつて。あほうカリュ」

「うるさいなあ」

むつとしてカリュは手を振り払おうとするが、ジニーはしつかとつかんではなきなかつた。

「なんだよ。はなせよ。痛いって　いや、ほんとに痛い！　つめ！」

「つめが立つてゐ！」

「あほバカリュ。あんまり心配させないで」

声が涙ぐんでいた。いやな気配に、カリュはあわてて明るい口調でいった。

「いや、だいじょうぶだよ。ほら、傷だつてないし。お姉ちゃんにおしてもらつたから」

「……ふーん」

一転、ジニーの声がひややかになる。ぽこっとカリュの手が自由になつた。

「なんだよ」

「なんでもないわよ」

わけがわからない。

カリュは新あつめにもどつた。そのとなつにジニーがかがみこむ。
「水汲みはいいのかよ」

「もう終わつたわよ。カリュが遅いから様子、みにきてあげたんで
しょ」

「そんなの、誰もたのんではないし」

「さびしかつたくせに。あまえんぼ」

腹がたつたカリュはもう口をきかないつもりで、そつぽを向いた。

カリュのあつめた薪をみたジニーが声をあげた。

「あー。生木がはいつちやつてるじゃない。けむりでけりやつから、
乾いてるのにしなさいつていわれてるでしょ」

「つるさいなあ。いいだろ、ちょっとくらい」

「よくない。そんなどからいつまでたつても」

いいかけて、ジニーは首をふつた。

「……カリュ」

「なに」

「ありがと」

カリュはジニーを見た。いつになくしおりじい表情に、びっくりする。

「「ないだの」と。ちゃんとお礼いっていないから。」「めん。それから、ありがと」

「……いこよ、べつに。なんだよ急に。きもちわるいな」

「素直じゃないな。ほめてあげたんだから、嬉しがりなさいよね」

「当たり前のことやつただけだろ」「

「あたしを助けるのは、当たり前?」「

「そーだよ」

「そつかあ。当たり前かあ」

カリュはジーヤの様子を横目でうかがつた。にじにじと、いつのまにか機嫌がなおっている。なにが気に入ったのかまるでわからない。謎だった。

「ね。ディーネさんつて、すんごい魔法使いなのよね

「うん」

「田の前で見た?」

「見た。すこかつた」

いまだも思い出せば鳥肌がたつ。ゴブリンの身体を燃やしつぶしたあの炎。カリュは氣をうしなっていたが、あの晩、村まわりの森火事を消したのもディーネだといっていた。火だけじゃなく、水とか氷とかの魔法も使えるのだろう。

ふと疑問におもつて、カリュは自分の手のなかの薪をみつめた。

「……あんなにすげい魔法がつかえるのに、焚き火とかするんだな」「どういづこと?..」

「だって、魔法とかで炎とかだせるのにや。こちいちこんなの使う必要とかなさそうかなって」

「うーん。でも、ずっと長いあいだ魔法を使つと疲れちゃひからじやない?」

「そういうものなのかな」
魔法を使えないカリュにはまるでわからない。

「もちろん、あたしなんかより全然たくさん使えるんだとおもうけ

ど、一晩中つて考えたら、大変でしょ」

「そういえば、ジニーはだいたい一日に十回くらいで疲れてしまつといつてた。その大事な一回をさつき、あんなことに使うなよなとカリュはおもつたが、いつたらまたケンカになりそつなので黙つていた。

「でも、そつかあ。そんなにすごい魔法使いの人なら、なにか習つてみたいな」

「なにかつて。魔法？」

「ほら、回復魔法とか使える人が村にいたら、やつぱり便利じゃない？ そういうの使つたら、あたしもカリュについていくつて」

「なに、いつてるんだよ」

とたんにけわしい表情で、カリュはジニーを見た。
「ジニーがついてくるのは町までだろ。約束したじやんか」「……そただけど

「遊びじゃないんだ。そんな気持ちで、おばさんを心配させるなよな」

それを聞いたジニーが眉を吊り上げた。

「そんなの、カリュがいわないでよ！ ばか！」

ばしん、と薪をカリュになげつけて、ジニーは去つていいく。どうすとふみしめる足音がものすゞくおこつていた。

幼なじみをみおくつて、ふと手元に目をおとしたカリュは顔をしかめた。せつかく持ち運びしやすいようにあつめた薪が、ジニーの投げつけた薪のせいで崩れてしまつている。

「なんだよ。邪魔にきただけじやんか」

ぶつぶつと文句をいいながら、カリュは薪あつめを再開した。

ひろいあつめた薪をもつて大木の根元に帰り、火をおこす。

とはいっても、火そのものはディーネがひとつぶやくだけで生まれたから、いつものように種火から慎重にそだてる必要はなかった。

「魔法だけで、焚き火をな」

組みあげた焚き火を調整しながら、カリュはさつきの疑問をたずねてみた。ディーネはこたえた。

「できるぞ」

「できるの?」

「うむ。造作もない」

「じゃあ、どうして」

そうしないの? 不思議に思つて首をかしげるカリュに、褐色の魔法使いはいった。

「カリュ。ぬしは魔法の火がどうして燃えているかしつてあるか?」

カリュは首をふる。視線をむけられたジーラもおなじ動作をした。ディーネが手をもちあげた。なにかをうけとめるようにひろげて、「いま、わしの手のひらのうえになにがある」

「……なんにも」

雨もふつてないし、落ち葉があるわけでもない。

「そうじやな。しかし、ここにはマテルがある」

「マテル……?」

「そう。マテルはどこにでもある。火にも水にも、空氣にも、土にも。わしたちのなかにある。魔法使いは、そのマテルで魔法をつかう」

ディーネが人差し指をもちあげた。そこに音もなく火が生まれる。

「いま、この火はマテルを燃やしてある。マテルは万変の素子。燃え、凍り、吹き、いかようにでも姿をかえる。魔法の火は、普通の火とは異なる。カリュ、ぬしが先日、手でにぎりしめても火がきれ

なかつたのもそのためよ

カリュは自分の手をみた。そこにはもう火傷のあとほのこつてい
ない。

「この火が燃え続けるということは、マテルを使い続けるといつ
とじや。いつたいどこからそのマテルが使われてあると思つ」

「ディー・ネさんの、なか？」

視線でとわれたジニーが、自信なさそうにこたえた。

「それが普通じゃな。しかし、身体のなかのマテルには限りがある。
疲れてしまふ。もう一つ、やりかたがある。この大気中のマテルを
使う。そうすれば大気の全てからマテルがなくならない限り、火は
燃え続ける」

「疲れない、んですか？」

「疲れん。わしのなかから使うマテルは最初だけじや。そういう式
を組んでしまえばいい」

カリュとジニーは顔をみあわせた。

いだいている疑問はおなじだった。　どうして、そうしないん
だろう。

二人を等分にみて、ディー・ネはほほえんだ。

「マテルは膨大じや。この世界すべてがマテルでできているといつ
ていい。しかし、だからといって決して無限ではない。わしがその
あたりに燃え続ける火をつくつたところで気にもとめんかもしれん
が、そんなことはせんな。できるといつ」とど、するといつ」とは
別じや

「便利なのに？」

「便利の果てにあるのは死よ。それをもとめ、あがくところに生が
ある」

カリュは顔をしかめた。難しい言葉はよくわからない。

「たとえばな。わしがそれで火をつくつておつたら、やつきのぬし

たちの会話はなかつたろうよ」

ジニーがびくっと身体をふるわせた。

「聞いてたんですか？」

「聞いておらんから安心せい。まあ、いまの反応でどんな会話だつたかわかるがの？」

大声をだすジニーに、にやりとティーネが笑う。ジニーは真っ赤になつた顔をおおつた。

「なんでもできるからといつて、それをやつたところで虚しいだけじや。友も会話もなく、ただ己だけの存在で、いつたい誰がわしの存在を認めてくれる」

魔法使いがカリュを見た。

笑顔のまま、そのまなざしがなにかいいたげだった。

カリュはナオミをおもいだしていた。

ディーネは彼女のことをいっているのだと、なんとなくそう思つた。

焚き火で温めた干し肉をかじつて夕食をすませ、焚き火を囲んで少し話をしたあとは、その日は休むことになった。

見張りの番をつくるらずに全員で休むという申し出に、カリュが驚いてたずねた。

「モンスターとか、危ないんじゃ」

三人とも寝てしまつたら、火の番もできない。

平然とディー・ネはこたえた。

「心配いらん。この辺には魔物除けを張つておく」

「それって、マテルの 無駄遣いにはならないんですか？」

ジニーがたずねる。

「使い手次第じゃな。マテルを如何に効率よく消費するかは、式による。わしながらまあ、一晩で火の玉一発程度かのう。よつは力の掛け具合じや」

「シキ、をちゃんとすれば、強い魔法が使えるようになりますか」

ジニーは世間話とはおもえないくらい真剣な表情だった。

「魔法を修めたいのか」

カリュはジニーを見た。田をそらしたジニーが焚き火の炎を見つめてうなづく。それにカリュが口をひらきかけたところに、ディーネがいった。

「無理じやな」

「……練習しても、ですか？」

「ぬし、はじめて魔法が使えるようになつたときになにか練習したか？ しどらんだろ。ぬしらにとつての魔法はそういうもの。使えるか使えないかに過ぎん」

「そうじやない人もいるの？」

カリュが口をはさんだ。ジーイが魔法をおぼえるのはともかく、ついてくるのは反対だったが、なんとなく気になる言い方だった。

「そういう輩もある」

こたえながら口元にうかべた表情が意味ありげで、カリュはさらには質問しようとしたが、それをかわすように魔法使いがいった。

「さて、そろそろ寝る支度にかかり。子供もは早く寝んといかん」立ち上がり、歩き出す途中でぽんぽんとジーイの頭をなでていく。「そうがっかりするな。本当にねしにとつて必要なときには、自然と使えるようになる。そういうもんじゃ」

焚き火のまわりの地面になにかをかきはじめたティーネから皿をはなし、カリュは布袋からうすっぺらい毛布をとりだす。

ジーイをみると、まだしょんぼりしていた。

なんだよ、とカリュはおもう。魔法なんて使えるだけいいじゃないか。

声をかけるかわり、カリュは近くにあつた水桶にわざと毛布を落として、すっとんきょうな声をあげた。

「あーーー！」

びつくりしたジーイが顔をあげる。

「ジーイ。魔法でこれ、乾かしてよ」

ジーイが眉をひそめた。

「……焚き火つかえばいいのに

「いいから」

カリュはふつせんぽうに毛布をおしつけた。

「やつてよ。ふあいあーでさ」

カリュを見上げたジーイが、少しだからくすりと笑った。

「しょうがないなあ」

毛布をうけとり、毛布の水に濡れた部分に手をかざす。ふあいあとささやいた手のひらに火の玉が生まれて、弱々しい炎がゆらゆらとゆれる。

「……焦がさないでよ。絶対だからね」「わかつてゐるわよ、もう。集中するから邪魔しないで」

怒りながら嬉しそうな幼なじみの様子にため息をついて、カリュは少しばなれたディーネの様子をうかがつた。魔法使いはしらんぷりをしてくれている。

なんでぼくがなぐさめないといけないんだろう。理不尽におもつて、カリュは手元の石を小ちく蹴りつけた。

結局、寝るまでの短い時間のあいだにカリュの毛布はかわききりなかつた。

カリュは水にぬれた毛布に我慢してくるまり、寝ることになる。それでも、焚き火でかわかすのも、ディーネに乾かしてもらいつことも少年はたのまなかつた。

火の元を追加していくべなかつた焚き火がゆつくりと灯りをよわめていく。

徐々に暗闇がつよまつていく視界で、カリュは田をどじづにじつとしていた。

大木の屋根にはばまれて、空に星はみえない。森のなかはまくらやみになりかけていた。

ときどき、獣の雄たけびが聞こえる。モンスターの叫びかもれない。

森で眠ることはない。家のようない壁があるわけじゃない。柵と掘りにまもられた村のなかではないから、いつモンスターにおそわれるかわからない。

ディーネは結界をはるといつていたけれど、そんなものが本当に効果があるのだろうか。すごい魔法使いだと知つてはいるが、不安はあつた。

不安と緊張がカリュから眠気をうばつている。それを好都合だとカリュはおもつていた。少年はこのまま眠るつもりなどなかつた。彼はチャンスをまつっていた。

近くでは幼なじみの寝息が聞こえる。添い寝するようにカリュと毛布を並べたジニーもしばらく寝つけないようだつたが、ようやく眠つたらしい。

「……ジニー、寝た？」

返事はない。

もう一度、相手の眠つているのを確認してから、カリュは幼なじみから身体をはなした。

物音をたてないよう、慎重に身をすらしていく。背中が小石のとがつてている部分をふんづけてしまい、悲鳴がでそうになつた。

あわてて口を閉じて声をころし、上半身をおこす。

焚き火はすっかり鎮火してしまい、くすぶつた火後がわずかに赤かつた。

あたりはほとんどまつくらいでなにも見えない。焚き火の向こう側に眠つているはずのもう一人の寝息はなかつた。

毛布にくるまつたままたちあがりかけて、カリュは自分の毛布の一部がジニーの身体に巻き込まれているのに気づいた。顔をしかめて毛布を手放す。ジニーの身体にそつとかぶせた。

闇になれども、ほとんどあたりは見えないほど暗闇が濃い。

カリュは手探りで目の前の地面の起伏をたしかめながら、すすんだ。

唯一、目印になつてくれている焚き火のまわりを四つんばいに這

う。そろそろのはずだけど、と思つたところで手がなにか柔らかいものにぶつかった。

あわててひつこめぬ。

呼吸をとめ、相手の様子をつかがつた。反応はない。眠つているのかもしない。

そう思つた瞬間、目の前の影が動いた。

「膝枕だけでは満足できんかったんか？」

からかうような声。カリュはあわてて相手の口をふさいだ。

遠くのジニーの寝息を確認する。

しばらく待つても、幼なじみに起きた気配はなかつた。

「もうつ。静かにしてよ、ディーネ」

「女の寝込みを襲つておいて、その言い草かよ」

カリュの手からのがれ、楽しそうにディーネがいった。一応、声をひそめてくれてはいる。

「……聞いたことがあるんだ」

「ほう」

いいながら、ディーネはなにもかもわかつたような気配だつた。まるで驚いていない。

そりやそうだ。だつて心だつて読めるんだから、なにを企んでてもばればれだひつと。相手に読まれていることを承知でカリュは毒づき、続けた。

「ジニーがいるから毎晩は聞けないし。ナオミのことが、それに

「わ」

カリュの言葉は途中で切れた。腕をつかんだディーネに、毛布のなかにひきずりこまれる。

「な、なにを」

「内緒話なんぢやろ。それこ、いつでもせんとぬじや風邪をひくぞ」

ディーネがいった。

カリュはあはれたが、あまりの温かさとそれからやけに柔らかな感触に、すぐに抵抗をやめてしまつ。たしかに毛布なしで森の夜はさむかつた。

いい匂いがある。眠氣をむかへ心地に、あわててカリュは首をふつて意識を覚醒させた。

「ぬし、冷えどんか。ほり、ちゃんとくつつけ」
じきじきする。鼓動をおわべつけて、カリュは平静をとつとくつた。

「……話がしたいんだけど」

「なんじゃ」

息がかかるほど近くでは、やけに話しづらい。田の前に相手の胸があつた。ディーネの息が頭にかかってじそばゆい。
こんなんじゃ無理だ！ カリュは身じろぎして無理やり相手に背をむけた。

「女に背を向けるとは、つれないわッぱじゅな
あきらかにからかっている相手の言葉は無視して、カリュはたずねた。

「どうして、ジーイを連れてきたの」

「どうしてもなにも、止めたいならぬしが止められとこつたぞ」
「そうじやなくて ぼくには、村を出るのはず」こ覚悟がこないとかいつてたのに

「そりやな。ぬし、村を出るのははじめてじゃ」

カリュはうなづいた。

「あの者は違う。父親のおつきで行つたことがある。もともと、隣町までが行動範囲になつておるから。ぬじとは違つ

まだ。

相手の言葉に言ひようもない違和感をおぼえて、カリュは口の中でつぶやいた。「一ドウハンイ。行動はんい？」

「村から出たことがあるから、連れてきたの」「連れてきたのはわしではない。ぬしよ。まあ、間接的に関わっているのは確かかの」

細かい言い回しの意味はわからない。気にせず、カリュはつづけた。

「村をでたとき、すゞく嫌な感じがしたのは、そのせい?」「少し違う」

カリュの頭にあごを乗せたディーネが低めた声音でつげる。「ぬしはあの村をでることがなかつたのではない。これから先も村をでるはずはなかつた」

カリュは眉をひそめた。

「これからもつて」

「のう、カリュよ。ぬしが空を飛べないのは何故か」

突然、会話がかわつたことに戸惑いながらこたえる。

「だつて、ぼくには翼なんてないし」

「なら、翼がないのは何故か」

「……そんなの、そう生まれてきたんだからしょうがないよ」

「そういうことじや」

ディーネがいつた。

「そういう風に生まれてきた。故にぬしは魔法を使えんし、空も飛べん。それと同じ理由で、ぬしは生まれた村の外に出ることとはなかつた。これまでも、これからもな」

ふと、カリュはこのあいだの夜のことを思い出していた。急にはじきとばされて、いくら頑張っても小屋に近づけなくなつたあの現象を、ナオミは魔法じゃないといった。

いくら頑張つたって空を飛べない、絶対的な決め事。

「それが、セツティ? そんなの、ぼくのこれからがそんなのに、

決められるつて……」「信じられない。

「それも違う。設定とは未来を決定づけるのではない。あくまで設定にそつて、ぬしは行動するだけよ。その後に生まれる結果が未来と呼ばれる」

「でも。だって、ぼくはこうして村の外に出てきて

「

ぞつとした心地でカリュは気づいた。

今まで、確かに村から外にでることなんて考えたこともなかつた。カリュがそう思ったのは、『ラゴン』とナオミのことがあったから。ディー・ネと出会つたからだ。

生まれついて空を飛べないセッティ。村を出ないのがそれなら、自分がそれをできたのはなぜだ。セッティというのが絶対的なものではないのか、それとも。

「あなたは、なに?」

相手を振り返らないまま、カリュはいつた。全身が強張つている。今、自分を後ろから抱く相手の得体の知れなさにはじめて気づいていた。

すごい魔法使いだという、それだけじゃない。この女人はきっと、ナオミとおんなじなんだ。

少年を抱く魔法使いがくすりと笑つた。

「わしはわしじゃ。見えているとおり。触れているとおり

『まかしだ、とかさねて聞く勇気がない。いまや身体を動かすことさえカリュは躊躇していた。そんなことをすれば、相手に噛みつかれて、そのまま一呑みに食べられてしまつような恐怖を感じていた。

「カリュよ、ぬしはこれから多くのことを知る。知らんといかん」

少年の内心に気づいていないふうに、ディー・ネがささやいた。

「ゆっくりでいい。いざれ急かなければならんのだから、今だけは

ゆっくりでな。もう休め。ぬしの世界は今日、途方もなく広がった。ただの歩き疲れでなく、頭が疲労しきっているはずじゃ。だから休め。いざれぬしの知りたいことはわかる。嫌でもそつなる」

そんなことをいわれても、カリュの頭はさえきつっていた。

不安と、確信と、恐怖がぐるぐるに全身をしばつてまるで眠気がやってくる気配がない。一晩中だつて眠れそうになかった。聞きたいこともまだまだある。けれど、聞いてしまうこともおそれしかつた。

少年の気分をほぐすよつにピティーネが子守歌をうたいはじめた。

聞いたことのある歌だった。

世界をつくった五匹の竜のお話。

それを聞きながら、嫌でもカリュは思い出してしまひ。森で見つけた小さなドラゴンと、その傷。ナオミのこと。

身体中を緊張させたまま、自分の首にゆるべ巻きつぶピティーネの腕を見下ろす。

もじこの腕に噛みついたら、そこから流れる血はもしかして青いのではないか。

そんな試せるはずのないことをカリュは考えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8653x/>

君はNPC？

2011年11月27日20時57分発行